

茨城県坂東市

な が ち ょ う

長丁遺跡

— 市道岩 1 級 10 号線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2019

坂 東 市
坂東市教育委員会
有限会社 勾玉工房 Mogi

序

私たちの郷土は、多くの沼沢地と台地からなる水と緑豊かな自然に恵まれた地域です。そのため、市内各所には古くから人々が生活を営んできた痕跡が残されており、住居跡や多くの遺物が発見されています。

今回の発掘調査が行われた長丁遺跡からは、縄文時代中期の住居跡や土坑から土器や石器が多数発見され、当時の人々の暮らしを復元する上で貴重な資料を提供してくれました。

本報告書は、その発掘調査の成果についてまとめたもので、地域に生活する皆さんに郷土の先史時代を理解する一助となることを祈念しております。また、本書がさらなる文化財の保護・普及につながることを願う次第でございます。

最後になりましたが、発掘調査の指導・助言をいただいた坂東市保護審議会委員の佐藤 誠氏、茨城県埋蔵文化財指導員の鶴見貞夫氏をはじめ、発掘調査を担当された㈲勾玉工房 Mogi の方々、ならびに調査に際して温かく見守っていただきました地域住民の皆様に厚く御礼申し上げ、ご挨拶といたします。

令和元年 5月

坂東市教育委員会
教育長 倉持 利之

例 言

1. 本書は茨城県坂東市弓田字山王腰 551-2 他に所在する長丁遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の面積は 166 m² である。
3. 発掘調査は平成 30 年 12 月 11 日～平成 31 年 2 月 7 日まで実施した。
4. 発掘調査は、坂東市教育委員会から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi 取締役大賀 健が実施した。

発掘調査の組織は以下のとおりである

調査担当者	橋邊優尚	有限会社勾玉工房 Mogi 調査員
調査員	谷 旬	同
調査補助員	篠原仁史	同
調査補助員	大賀庸平	同
調査補助員	山室 敦	同

発掘作業員

小野 豊 加藤通紀 露久保三郎 中村 薫 松島吉宏 森永典昭 山崎一義

5. 整理作業は千葉県富里市御料 1009-28 有限会社勾玉工房 Mogi にて実施した。

調査担当者 橋邊優尚 有限会社勾玉工房 Mogi 調査員

調査員 宇佐美義春 同

整理作業員 佐藤政代 篠原みよ子 篠原仁史 橋邊明子 高橋 豪 大賀庸平

6. 遺物の水洗いはすべての遺物に対し行い、全量の重量を求めた。また注記は注記マシーンを用い、微細なものはビニールに入れて表記した。長丁遺跡の遺跡コードは 218-062。

7. 周辺の遺跡図 1/25,000 は国土地理院発行図を、遺跡地形図 1/2,500 は坂東市都市計画図を用いた。

8. 掲載図面は以下の縮尺で行った。

遺構図は 1/40・1/60、遺物は土器・礫石器類 1/3、剥片石器・土製品 1/2。

9. 整理作業における遺物の接合及び補強材については、セメダイン C、及びエポキシ系樹脂を用いた。

10. 発掘調査から整理作業に至るまで、谷 旬・大賀 健指導のもと執筆並びに編集、写真撮影まで橋邊優尚が行った。

11. 発掘調査に係るすべての遺物は使用・未使用別に収納箱に入れ、台帳・図面・写真類とともに坂東市教育委員会で保存している。

12. 発掘調査から整理調査に至るまで下記の方々諸機関にご指導を賜った。以下に記して謝意を表すものである。(順不同・敬称略)

茨城県教育委員会 佐藤 誠 鶴見貞夫 大村 裕 斎藤弘道 戸田哲也 篠原 正

浅間 陽 大工原豊 林田利之 角田真也 関根慎二 カメラのスギハラ 風見 章

毛野考古学研究所 有限会社小川重機 有限会社丸カ土木建材興業

目 次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡周辺の環境	2

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 堅穴住居跡 (SI)	6
第2節 土坑 (SK)	25
第3節 ピット (P)	32

第3章 まとめ

第1節 遺構について	33
第2節 本遺跡出土土器資料の種類とその組成について	33
第3節 検出されたチャート製有茎石鏃	38
第4節 本遺構出土加曾利E 3式土器の編年的位置づけ	39

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	25
第2図 基本層序	2
第3図 周辺遺跡	4
第4図 遺跡全体図	5
第5図 第1号住居跡	7
第6図 第1号住居跡出土遺物 (1)	8
第7図 第1号住居跡出土遺物 (2)	10
第8図 第1号住居跡出土遺物 (3)	12
第9図 第1号住居跡出土遺物 (4)	14
第10図 第1号住居跡出土遺物 (5)	15
第11図 第2号住居跡	17
第12図 第2号住居跡出土遺物 (1)	19
第13図 第2号住居跡出土遺物 (2)	20
第14図 第2号住居跡出土遺物 (3)	22
第15図 第2号住居跡出土遺物 (4)	23
第16図 第2号住居跡出土遺物 (5)	24
第17図 第1号土坑	25
第18図 第1号土坑出土遺物 (1)	27
第19図 第1号土坑出土遺物 (2)	28
第20図 第1号土坑出土遺物 (3)	30
第21図 第1号土坑出土遺物 (4)	31
第22図 第1号土坑出土遺物 (5)	32
第23図 ピット	32
第24図 加曾利E 3式深鉢	34
第25図 加曾利E 3～E 4式	35
第26図 鉢	36
第27図 壺・双耳壺	36
第28図 有孔跨付土器	37
第29図 連弧文系土器	37
第30図 大木系土器	38
第31図 信州系土器	38

挿表目次

第1表	周辺遺跡	4	第9表	第2号住居跡出土土器観察表(3)	23
第2表	第1号住居跡出土土器観察表(1)	9	第10表	第2号住居跡出土土製品観察表	23
第3表	第1号住居跡出土土器観察表(2)	11	第11表	第2号住居跡出土石器観察表	24
第4表	第1号住居跡出土土器観察表(3)	13	第12表	第1号土坑出土土器観察表(1)	29
第5表	第1号住居跡出土土製品観察表	14	第13表	第1号土坑出土土器観察表(2)	31
第6表	第1号住居跡出土石器観察表	15	第14表	第1号土坑出土石器観察表(1)	31
第7表	第2号住居跡出土土器観察表(1)	21	第15表	第1号土坑出土石器観察表(2)	32
第8表	第2号住居跡出土土器観察表(2)	22	第16表	長丁遺跡出土チャート組成表	39

写真目次

図版1

1. 調査区全景

2. 1区完掘状況

図版2

1. 第1号住居跡完掘状況(北から)

2. Aセクション(西から)

3. Bセクション(北から)

4. 炉a・b完掘状況(西から)

5. 炉a・c完掘状況(北から)

図版3

1. 炉c完掘状況(北から)

2. 遺物出土状況(南西から)

3. 遺物出土状況(南西から)

4. 作業風景

5. 2区完掘状況(東から)

図版4

1. 第2号住居跡 完掘状況(南東から)

2. Aセクション(東から)

3. Bセクション(南から)

4. 炉(南西から)

5. 炉中心(南西から)

図版5

1. SK1セクション(北から)

2. SK1完掘状況(南東から)

3. SK2セクション(北から)

4. SK2完掘状況(東から)

5. 遺物出土状況(南から)

6. 遺物出土状況(南から)

7. 第1号土坑セクション(北から)

8. 第1号土坑完掘状況(南東から)

図版6

第1号住居跡出土遺物(1)

図版7

第1号住居跡出土遺物(2)

図版8

第1号住居跡出土遺物(3)

図版9

第2号住居跡出土遺物(1)

図版10

第2号住居跡出土遺物(2)

第1号土坑出土遺物(1)

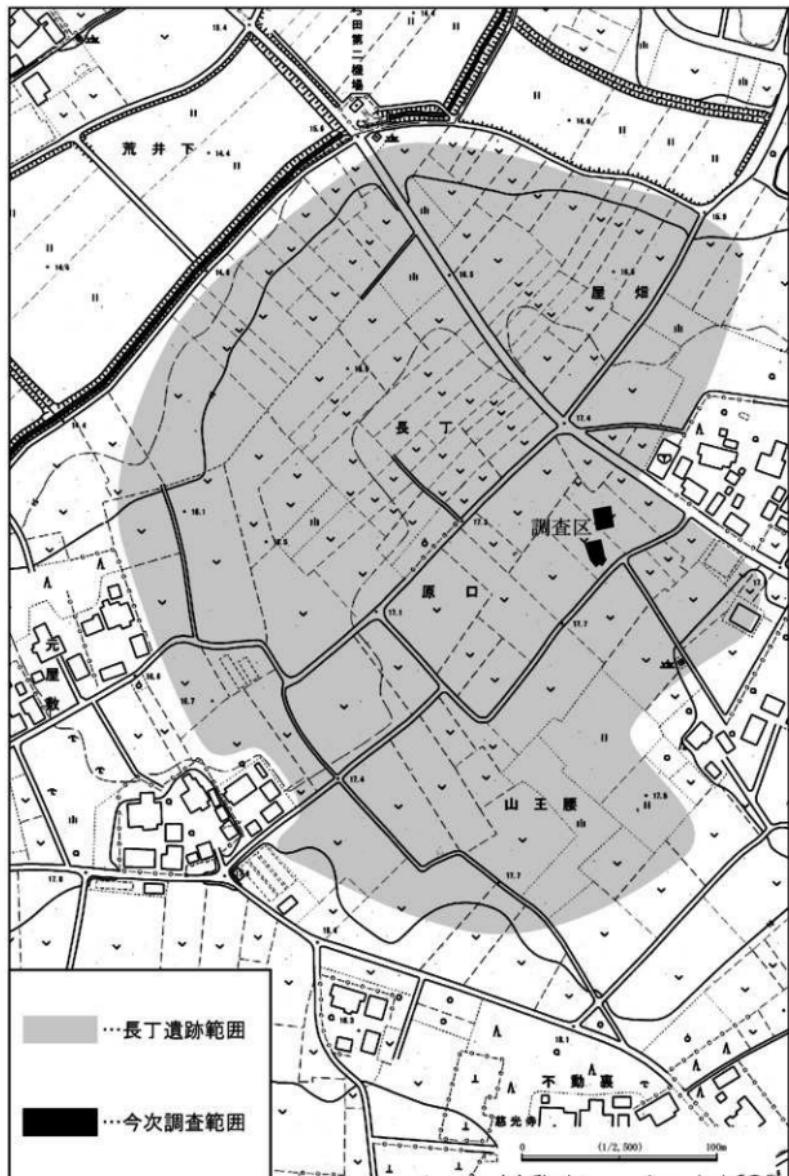
図版11

第1号土坑出土遺物(2)

図版12

第1号土坑出土遺物(3)

報告書抄録・奥付



第1図 遺跡位置図

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

2018（平成30）年3月30日、坂東市道路課から弓田・富田地区的市道岩1級10号線整備の予定があり、埋蔵文化財の照会があった。市教育委員会では、予定地内には長丁遺跡（市遺跡番号62）が存在し、調査が必要であることを回答した。

平成30年6月18日、25日、7月2日の3日間で、遺構の有無や性格などを把握するために土地所有者の協力を得て試掘・確認調査を実施した。その結果、2か所の遺構と多数の遺物（縄文土器）が確認されたため、その取り扱いについて関係課と協議を重ね、現状保存が困難であることから発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで合意した。

調査は事業者の委託を受けた有限会社勾玉工房Mogiが実施することとし、平成30年11月12日、埋蔵文化財発掘調査の届出を茨城県教育委員会に進達した。発掘調査に際しては、坂東市文化財保護審議会委員である佐藤 誠氏、茨城県埋蔵文化財指導員である鶴見貞夫氏に指導・助言をお願いし、平成30年12月10日から平成31年2月7日まで発掘調査を行った。

（坂東市教育委員会）

第2節 調査の方法と経過

・現地調査 表土除去は12月10日から開始した。12月11日から作業員による遺構の精査を開始した。作業は鋤籠により北側調査1区から開始し、南側2区へと進めた。基準杭はMT-1～MT-7まで7本を設置しこれを基準に現地の測量に対応した。

杭番号	X 座標	Y 座標	標高
MT-1	8984.755	5289.485	16.897
MT-2	8980.856	5296.944	16.620
MT-3	8972.913	5301.010	16.655
MT-4	8963.672	5290.462	16.576
MT-5	8957.436	5298.936	16.690
MT-6	8968.536	5296.995	17.000
MT-7	8974.655	5298.049	16.573

遺構確認状況写真撮影の後、遺構掘り下げ調査を行った。竪穴住居跡については基本的には十文字に直行するベルトを設定し、土層観察を行った。土層断面の観察・実測、遺物出土状況の写真撮影後ベルトを除去し、遺物の取り上げを実施した。平板による作業で、縮尺は1/20である。土坑は基本的に半截して土層観察、写真撮影の後に完掘し平・断面図を作成した。写真撮影はモノクロ35mm・カラーリバーサル35mm、また1,810万画素のデジタルカメラでも撮影を行っている。空中写真撮影はDJI Phantomを使用した。2月6日に市教育委員会より現地調査の終了確認をいただき、2月7日埋戻しが完了し現地調査を終了した。

・整理作業 調査が終了後持ち帰った資料は、直ちに台帳を作成し、報告書作成に取り掛かった。遺物は水洗い洗浄後に、注記専用マシーンによって注記した。遺物トレースはAdobe Illustrator CS4により、写真撮影はデジタルカメラ2,400万画素を用いて実施した。また拓本・

デジタル写真の修正には Adobe Photoshop CS4 を用いている。遺物の接合にはセメダイン Cを、補修部分には樹脂材バイサムを用い補填した。遺構図面は修正加筆の後に、Adobe Illustrator CS4 を用いてトレースしている。編集作業には、Adobe InDesign CC を用いて実施した。報告書原稿の校正を市教育委員会に依頼し、校了後印刷・刊行し、調査すべてを完了。調査に関するデータ並びに調査関連資料とともに教育委員会に納品する。

第3節 遺跡周辺の環境

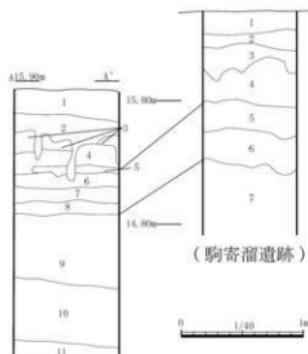
(1) 地理・地形 坂東市は 2005 年に岩井市と猿島郡猿島町の新設合併により誕生した 52,500 余の人口を有す都市である。その名の示すとおり “坂東の中央” にあり、北の大河利根川と鬼怒川に挟まれた肥沃な土地である。坂東市北部の弓田字山王腰にある長丁遺跡は利根川水系に属する飯沼川^(注1)と江川^(注2)および江川支流(立川)の作り出した低台地上に位置し、今回の調査地点は 2.3ha におよぶ遺跡範囲内の東端に当たる。標高(tokyoepelを TP. と略す) 17 m を測り、現況は広大な畑地である。

縄文時代を代表する遺跡の成因立ちを語るには、関東平野の成因を概略せねばなるまい。リス氷期の終わり(130,000 年前)には西に三浦半島、西北に太古の陸地秩父山系に囲まれた広大な地域はそもそもそのほとんどが海底にあり、わずかに嶺岡山系と “銚子島” がみられるだけの構造盆地である。下末吉海進ともいわれ、巨大な古東京湾が横たわる(菊池 1980)。

このころから激変する気候変動に伴って起ころ海底の隆起・低台地の浸食・風化作用による地形の変化と地質堆積を見ていこう。まず太平洋岸の隆起による海浜の成長により、海洋から湾への変貌、その後の活発な新造山運動とそれに伴う河川の土砂流出作用、最終氷河期には古箱根・古富士や赤城・男体、そして現在活動中の新富士や浅間山など広域に影響を及ぼす火山活動に伴う礫石降灰作用へと続く関東平野基盤の形成である^(注3)。

その後の変動 “寒の戻り” ヤンガードリアス期(13,000 年前)」「縄文海進と古鬼怒湾・奥東京湾の形成(6,000 年前最盛期)」(羽鳥 1975)などにより各地に沼沢・河川がそれぞれの水系を形づくることとなる。江川両岸もこの時期から狩猟採集生活が始まったものと思われる。

(2) 地質 まずは調査区北西端に設定したテストピットを概観する。1 層は畑地特有のクロボク土、2 層以下が立川ローム質層である^(注4)。2 層はソフト化したローム上面で 3 層とは不整合面で接する。とともに黄褐色を呈し、粘性ややあり。4・5 層は灰色気味の黄橙色土で下層には微量のガラス質微粒子が認められる。6~8 層は縮り粘性のある暗黄褐色土層で上下の層に比し黒味がある。8 層下面でほぼ 1m (TP. 14.85m)。9 層は黄褐色土、10 層は鈍い黄褐色で粘性が強まり、層厚 1 m (TP. 13.80m) で 11 層と明瞭に分層できる。



第2図 基本層序

11 層は灰色の軽石がブロック状に堆積するが、縮まりややなし、粘性なし。深さ 20 cmまで確認したが、掘削基準に則り中止、層厚は不明である。

これを近接する駒寄溜遺跡（編引 2013）と対比したのが第 2 図である。ここでは第 4 層を「ガラス質粒子を微量含み…」第 II 黒色帶上層に、第 5 層を同下層としている。立ち返って本遺跡と比定するなら 5 ~ 8 層に相当し、5 層を姶良 Tn バミス (AT) としたい。また 11 層は鹿沼層 (Ag-KP) の良好な堆積を示す事例である。

（3）歴史 本稿では縄文時代の遺跡に限って概観してみよう（以下、方向・距離の目安は今次調査地点とする）。

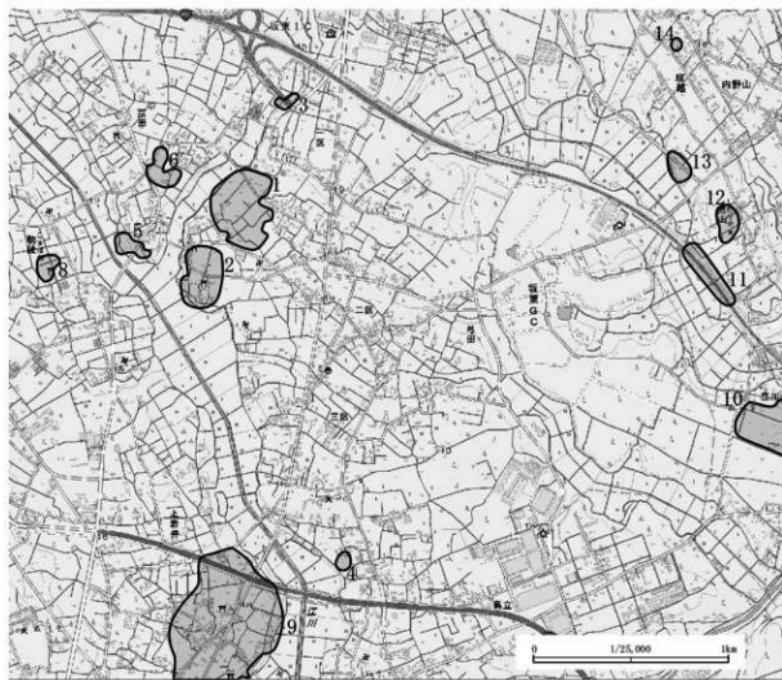
江川東岸には字富田と一区を隔てる溺れ谷があるが、一区側に位置するのが長丁遺跡（①）で早期沈線文系土器や晚期安行式とともに中期加曾利 E 式が採集される。坂東インター付近にあつた駒寄溜遺跡（③：北 0.55 km・編引 2013）からは中期阿玉台 IV 式期の住居跡 1 軒と早期前半～後期後葉に至る包含層が発見された。談議所遺跡（②：南南西 0.4 km）でも後期堀之内式・加曾利 B 式や安行式が、立川との合流地点にある松葉遺跡（④：南 1.9 km）では早期条痕文系土器が採取された。溺れ谷対岸に位置する黒阿弥陀遺跡（⑥：西北西 0.5 km）からは加曾利 E 式、その奥の吉右衛門前遺跡（⑦：北西 1.2 km）では沈線文系土器が見つかっている。江川西岸の香取東遺跡（⑧：西 1.1 km）にも加曾利 E 式があり、宮内遺跡（⑨：南 2.2 km・小林 2012）では古墳時代から古代へと続く大集落とともに後期の土坑 2 基が検出された。

立川沿いの塚越南遺跡（⑩：東北東 2.3 km・西村 1984）では早期撫糸文系や前期の土器とともにヤマトシジミやハマグリも採取され、当時汽水域であったことがわかる。然山西遺跡（⑪：西 2.2 km・佐藤 2013）からは前期黒浜式中心に 19 軒・浮島式中心に 11 軒の住居跡が確認され、他にも加曾利 E 4 式・後期中葉など合計 37 軒の大集落が明らかとなった。また小城南・小城北遺跡（⑮・⑯：北東 2.1 km）にも後期の遺物がある。

縄文海進期の海岸線を示した東木図（東木 1926 他）を見るまでもなく遺跡周辺は渡良瀬川・思川の流れ込む古鬼怒湾の西北端に位置し、縄文文化の宝庫である（注 5）。

注

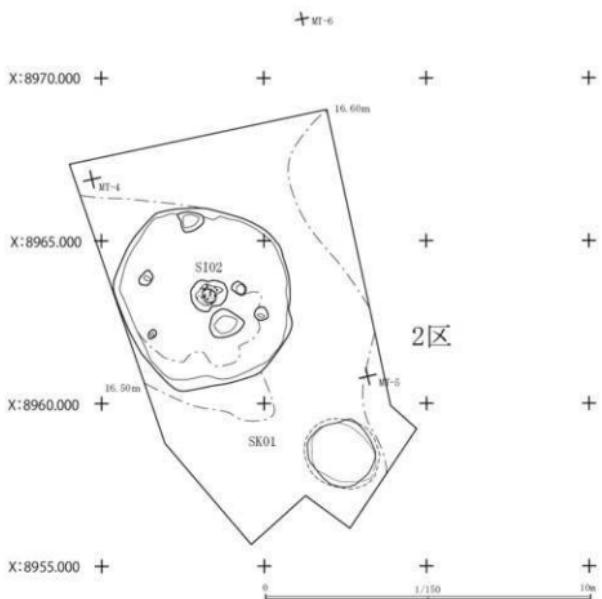
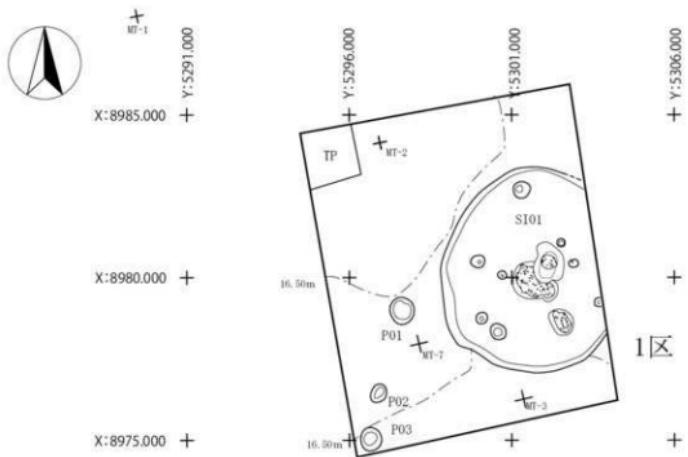
- 享保年間（1716 ~ 1736）、飯沼新田開発に伴う利根川への新堰開削事業でできた用水が現在の飯沼川と東・西仁連川（長命他 1982）。
- 坂東市音谷北部に源を発し市内を南流して音生沼に達する全長 14.5 km の 1 級河川。
- 初期には鹿島・房総丘陵起帶のため海から内湊へ。水深 200 m の海底は部厚い成田層群（126,000 年前～）で覆われ、平坦な浅海が形成される。その間に陸地化が進み各河川から供給される土石砂の堆積が山麓付近では扇状地を、下流域には三角州を各地に残した。ヴィルム（最終）氷期（70,000 ~ 16,500 年前）の最寒冷期（21,000 年前）には海拔 100 m、気温（現在と比べ）-6°C となり、古東京湾底は平坦な台地と化す。同じころの活発な火山活動を背景に多量の火山灰（武藏野・立川ロームや割石軽石テフラなど）と河川による浸食で現在の関東平野の原型が形を表す。後水期（第 4 水期とも、16,000 年前～現在）に至って、我々がなじみ深い東京湾や霞ヶ浦、または小河川とともに取り残された沼沢を関東平野中央部各地で見ることができる。この項の記述には茨城県霞ヶ浦環境科学センターホームページ・ファイルを参考にした。
- 「クロボク土」「ローム質層」の名称について（山野井 2015）に依った。
- 『いばらきデジタルマップ』文化財編 2013 および『駒寄溜遺跡』（編引 2013）などを参考にした。



第3図 周辺遺跡

第1表 周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	種類	現況	時代・時期
1	長丁遺跡	弓田字長丁 695	包蔵地	畠・宅地	縄文
2	談義所遺跡	弓田字談義所 326	包蔵地	畠・神社	縄文・古墳
3	駒寄遺跡	弓田字立山	集落跡	畠地・山林	縄文・奈良
4	松葉遺跡	馬立字松葉 103	包蔵地	畠	縄文・古墳
5	打出遺跡	富田字打出 576	包蔵地	畠・住宅地	縄文・奈良
6	黒阿弥陀遺跡	富田字黒阿弥陀 916	包蔵地	畠・住宅地	縄文・奈良
7	吉右衛門前遺跡	富田字吉右衛門 702	包蔵地	畠・住宅地	縄文・奈良
8	香取東遺跡	駒跳字香取東 133	包蔵地	畠・神社境内	縄文
9	宮内遺跡	岩井字郷込後 951	包蔵地	畠・神社境内	縄文・奈良
10	駒寄遺跡	弓田字駒寄 4091	包蔵地	畠	縄文・古墳
11	然山西遺跡	内野山字然り山	集落跡	畠地・山林	縄文・古墳・奈良
12	然山遺跡	内野山・然山 311-2	包蔵地・貝塚	畠地	縄文・古墳
13	塚越南遺跡	内野山・塚越 267-5 外	包蔵地	畠地・宅地	縄文・古墳・中世
14	塚越西遺跡	内野山・塚越 193-2 外	包蔵地・貝塚	山林・畠地	縄文
15	小城南遺跡(山崎遺跡)	杏掛・小城 5528 外	包蔵地	山林	縄文・古墳・奈良
16	小城北遺跡(山崎遺跡)	杏掛・小城 5536 外	包蔵地	畠・山林	縄文・弥生・古墳



第4図 遺跡全体図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡(SI)

・第1号住居跡

検出位置：本遺構は第1区の中央において検出された。平面形状：東側が調査区域外となるために未調査であるが、概ね楕円形と見られる。規模：北東から南東にかけて、計測可能な最大部分で630cm、これに直行する北西から南東部分で558cmを測る。確認面下の掘り込みはおよそ30cm。壁形状：いずれの壁も同様にやや緩やかに立ち上がる。また、壁溝は検出されていない。覆土：9層に分割され、概ね自然堆積と判断される。床面：若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦に踏み固められ全面に硬化している。柱穴：8本検出されている。P1・P2・P3・P8は壁際に沿って配置されるもので、遺構の主柱穴と想定できる。P1～P4で断面観察を行ったが、P3以外では柱痕の検出はできていない。各柱穴の計測値および形状はP1：44.1×38.7×30.0cm、円形。P2：37.9×34.5×29.6cm、不整円形。P3：52.6×46.4×96.1cm、楕円形。P4：52.9×50.8×89.8cm、不整円形。P5：28.2×25.1×29.2cm、円形。P6：26.5×26.0×10.4cm、円形。P7：30.0×22.8×42.2cm、隅丸方形。P8：記述もれ。炉：3基が検出されている。炉aと炉bは重複関係にあり、炉bの方が掘り込みも深く古い。炉bを埋め戻した後、炉aを新たに設置している。炉b・炉cはともに掘り込みはなく、床面が赤く変色した部分として捉えられた。所謂地床炉と判断した。したがって、炉b・炉cの断面図はない。規模は炉aで117.1×110.6cm、瓢形。炉bは115.9×87.8×13.1cm、楕円形。焼土は中心部分のみに円形に検出されている。炉cは87.6×67.6cm、概ね楕円形で中心部分に焼土が分布しない部分が確認されている。

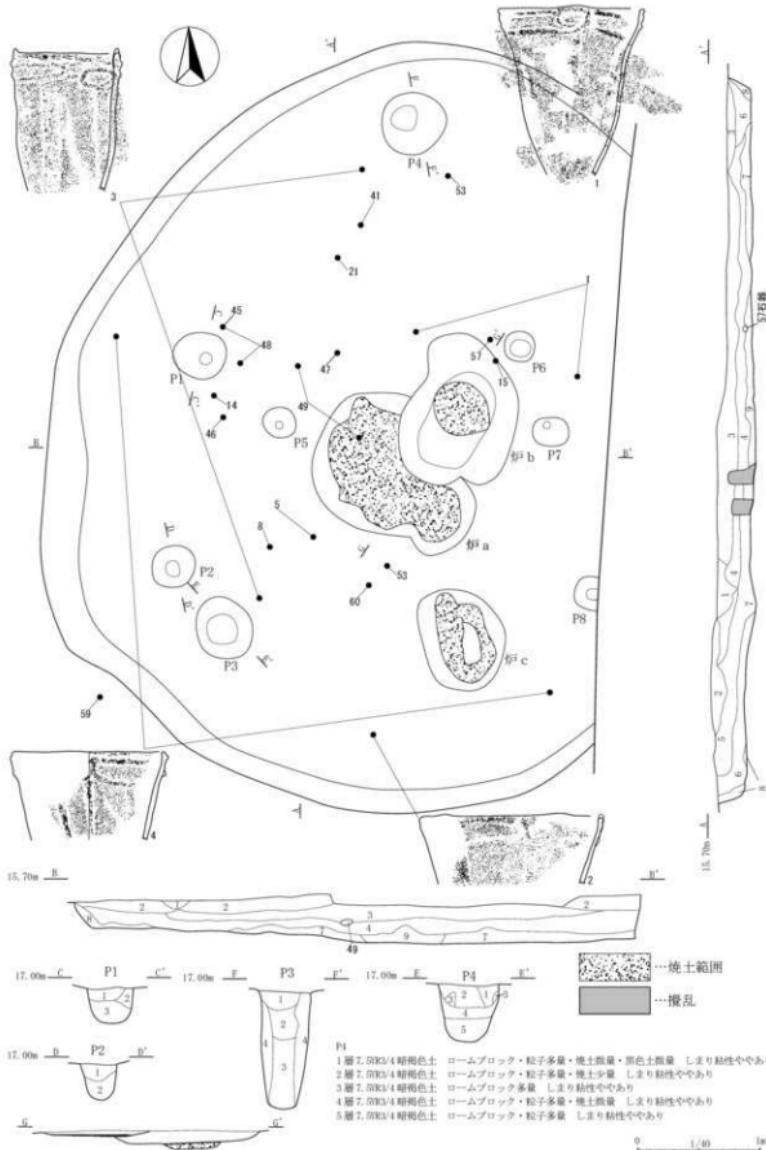
- 1層7.0m3/2暗褐色土 ロームブロック・粒子多量 しまり粘性ややあり
2層7.0m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・褐色土ブロック少量 しまり粘性ややあり
3層7.0m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・黑色土少量 しまり粘性ややあり
4層7.0m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・褐色土ブロック中量・黑色土少量 しまり粘性ややあり
5層7.0m3/2暗褐色土 ロームブロック・粒子少量・褐色土ブロック少量 しまり粘性ややあり
6層7.0m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子中量・褐色土ブロック微量 しまり粘性ややあり
7層7.0m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・褐色土ブロック多量・地上ブロック 中量 しまり粘性ややあり
8層7.5m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・褐色土ブロック少量・黑色土微量 しまり粘性ややあり
9層7.5m3/4暗褐色土 ロームブロック・粒子多量・褐色土ブロック多量・黑色土中量 しまり粘性ややあり
- 1層 3098/2灰黃褐色土 帯黃褐色少量 しまり粘性ややあり
2層 3098/3灰・黃褐色土 ローム粒子少量 しまり粘性ややあり
3層 3098/2黒褐色土 ローム粒子少量 しまり粘性ややあり
4層 3098/4褐色土 ローム粒子少量 しまり粘性ややあり

出土遺物

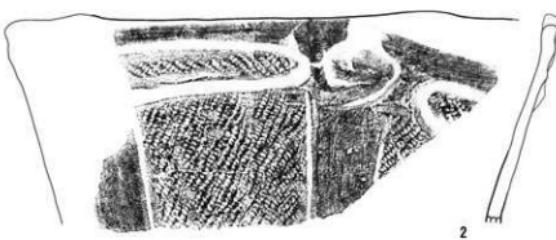
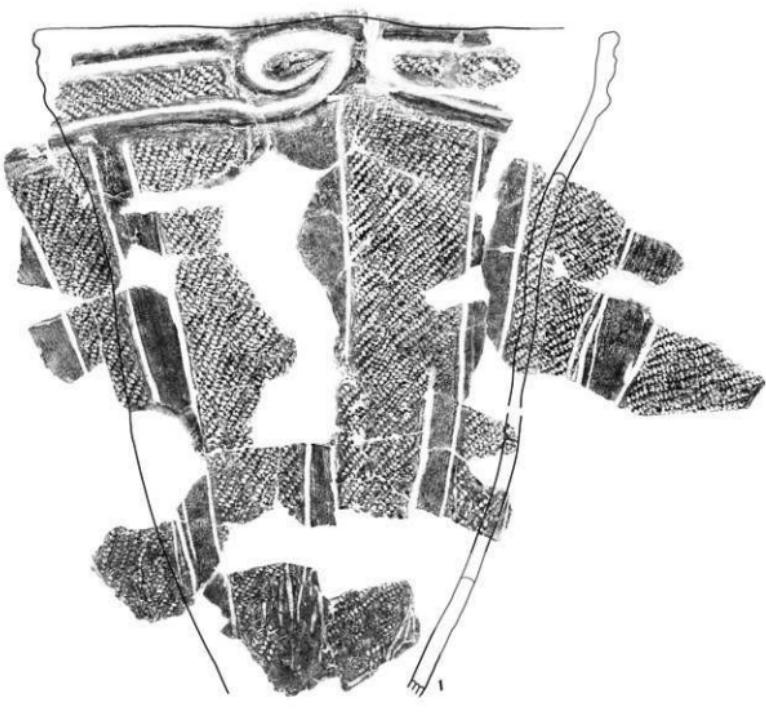
本遺構から出土した遺物は、掲載土器資料51点、重量8,944.6g、掲載石器資料8点、997.2g。未掲載土器45,200.9g、石器199.6g、礫120.2gであった。

縄文土器深鉢では口縁周辺で緩やかに内湾するが、キャリパーは崩れ直線的に開く形状のものが多く、鉢状、大きく胴が張り口縁部が無文で屈曲して開く双耳壺、または有孔鈎付土器が加わる。遺物の出土状況は遺構全体に広く散乱しており、層位的にも本遺構に伴っているものと積極的に判断できるものではない。2の遺物等は内面下半が熱を受け剥離が激しいが、炉とは離れた部分から出土しており、炉帶土器ではない。周辺から投げ込まれ炉帶に使用された遺物と判断される。

なお、59の黒曜石製石鏃は、明らかに遺構の外からの出土であるが、他に遺構もなく本遺構



第5図 第1号住居跡



0 (1/3) 10cm

第6図 第1号住居跡出土遺物（1）

出土遺物に含めて報告した。

以下各遺物について概略を説明し、詳細は遺物観察表に纏めた。

土器：1～4は隆線の貼付により渦巻文を起点とする楕円区画を描く。1・2では低い隆線で3・4では高い。特に3では渦巻文が崩れそれぞれ独立した楕円となっている。

5・6・7では区画に二重隆線が用いられる。8・9は同一個体となる突起部分の資料であろう。対峙するもので、横帯の渦巻文の延長が波頂部に延び「の」の字を描く。10・11は波状口縁の頂部直下に円孔が穿たれる。以上、主文様は隆線により描かれるものをまとめた。加曾利E 3～4式中段階。

16以降は文様区画が太い沈線で描かれるものである。14～16では口唇直下に無文帶が巡り、17では逆「U」字形の区画が連続し、文様間に蕨文様が付される。18は内湾する口縁部に二重の沈線による横帯の区画がさらに縦方向に展開するものである。26は口縁部の楕円区画が太い沈線のみで表現される。21・22では口唇直下に平行する2本の沈線間に円形刺突列が1条付される。31・32は口縁直下に隆帶を巡らせ帶上に刻み目を施す。34では縦方向に垂下する隆線上に刻みが施される。19は口縁部に刻みを有するもので、地文はLR繩文。以上は加曾利E 3～4式新段階。

25・27・28・30～33は連弧文土器である。25では口唇直下に「C」字状刺突文様が巡る。27・28では半截竹箇の並行した列点が並ぶ。25・30では地文にLの撫糸文が縦方向に施文されている。29ではLRの繩文が地文となっている。26・29～33は弧状の沈線が描かれる。

34～37は鉢形を呈するもので口縁は強く内湾し、口唇直下に太い沈線が1条巡る。以下地文には櫛歯状の工具による縦方向の条線が密に施文される。34の沈線状にやや波打つ沈線が加わっているが渦巻文が退化した沈線と判断される。

38～41は信州系の土器の影響を受けるものであろう。38では放射状の並行沈線が描かれる。39では磨消懸垂文間の地文に波状の曲線を垂下させる。40・41では口縁端部にまで条線が延びており、曾利3式の影響が強い。

40・41是有孔鍔付土器と判断した。薄手で大きく湾曲する。41では二重隆線によって渦巻文が描かれ、外面に赤彩が施される。

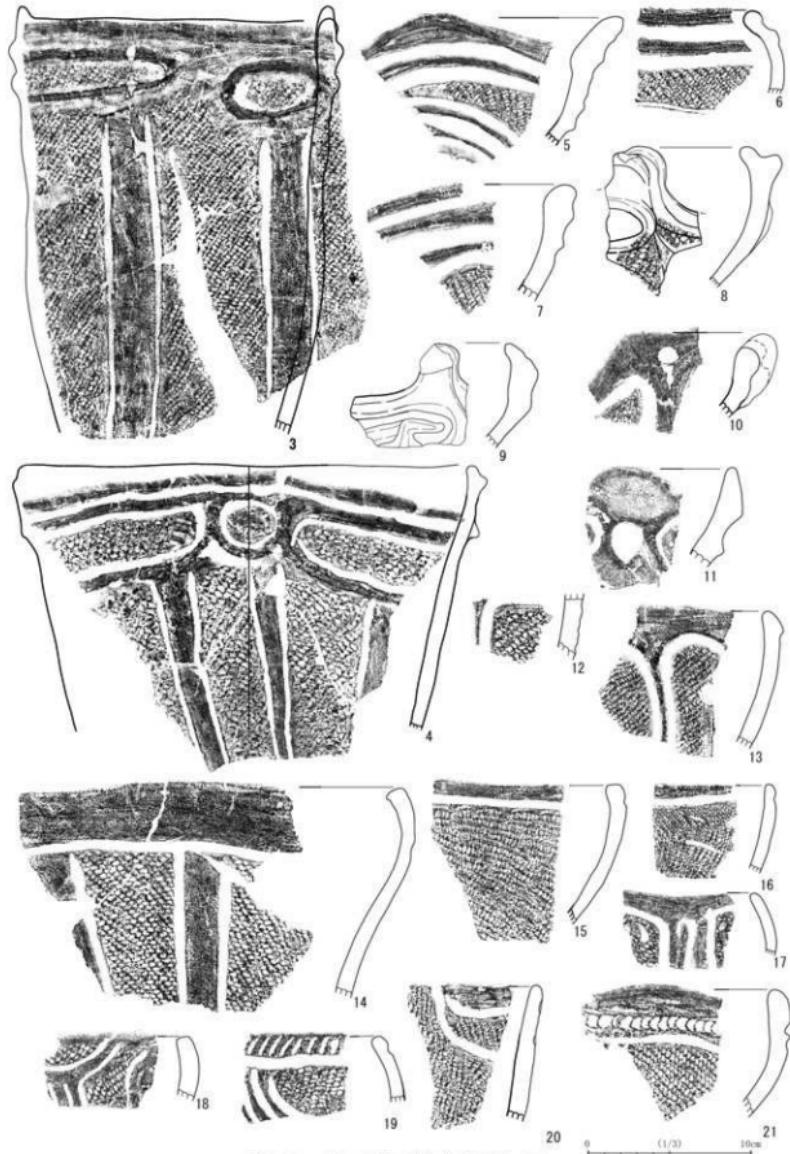
42・43は双耳壺となるもので、口縁部は幅広の無文帶で大きく屈曲して開く。屈曲部には沈線が巡っている。

45～50は底部の資料である。底部の形状から器種が分類できるが、大半が上半部を欠損するもので断定はできない。いずれの資料にも磨消懸垂文が垂下し、RLまたはLRの単節繩文が施文される。

51は混入土器で、中峠式段階であろう。交互刺突によるクランク文様が描かれる。

第2表 第1号住跡出土土器観察表(1)

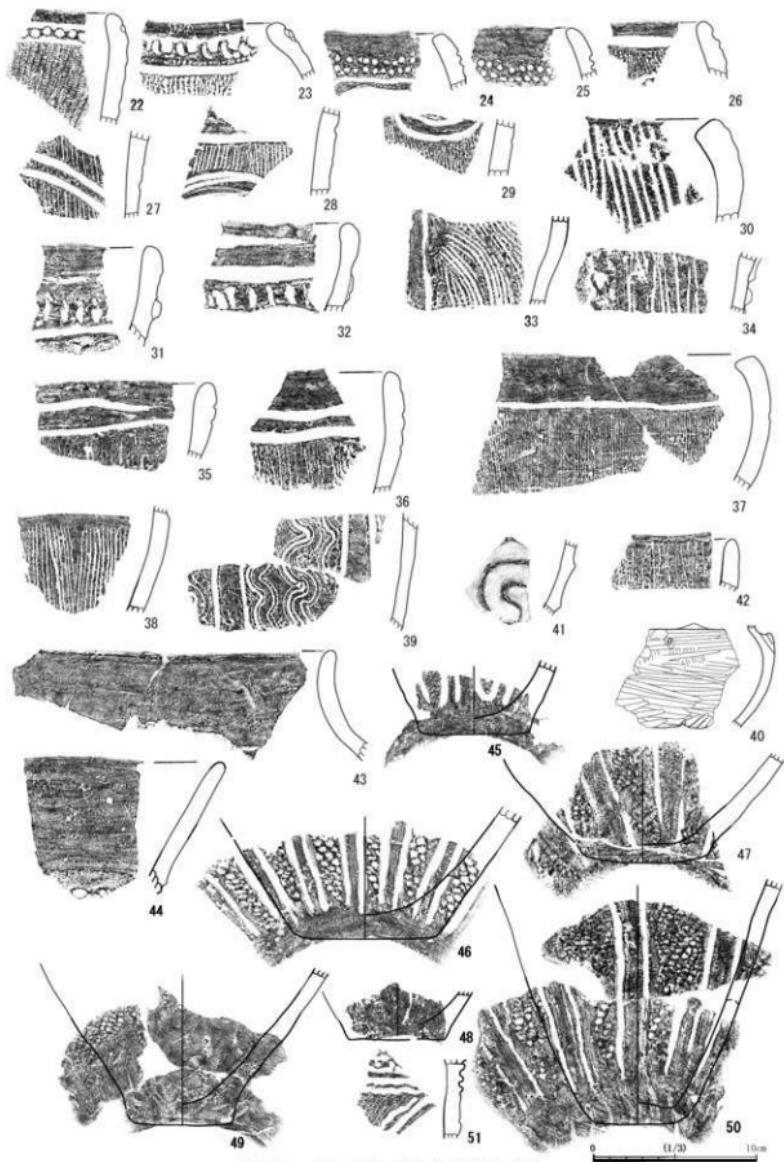
測定番号	注記番号	種類	器種	残存	計測値			渦巻の特徴	形態の特徴	土			器色	焼成	型式	埋蔵時期	備考
					口径	底径	高さ			白	赤	青					
					(mm)	(mm)	(mm)			粘土	石	繩					
1	S301 1区一括 No.26 No.34	調文 土器	深鉢	2/5	36	—	(41.7) 180.9	窓具の跡形、 底部欠損、口 縁は緩やかな 波状を呈す。	波頂部の渦巻文を中心として口部に横帯 の楕円区画を太い沈線によって区画す る。胸部はやや幅が狭い窓形を有す。 胸部はやや幅が狭い窓形を有す。	○	△	△	○	上：解褐色 下：にみる隙 良好	加曾利E 3 古～中		
	S301 2区一括 No.41	調文 土器	口縁糊上 半部1/3	33.9	—	(13.2) 664.4	窓具の跡形、 底部欠損、口 縁は緩やかな 波状を呈す。	波頂部の渦巻文を中心として口部に横帯 の楕円区画を太い沈線によって区画す る。胸部はやや幅が狭い窓形を有す。 胸部はやや幅が狭い窓形を有す。	○	△	△	○	暗褐色	良好	加曾利E 3 古～中		



第7図 第1号住居跡出土遺物（2）

第3表 第1号住居跡出土器観察表(2)

出 土 器 番 号	注記番号	種類	器種	剖面測定			器形の特徴	形態的特徴	紳士				器成	型式	相成時期	備考		
				底厚	底径(幅)	器高			底子	赤子	石子	輝石						
3	S301 No.2 No.51 4区-1	調文 土器	深 鉢	底部 欠損 1/2	18.6	-	(26.1)	1140.5	縦長の棒形、口 縫は平行で頂部 に三角形の突起 が付される。内 部には手印がある。	口沿部横式になら、底上に側内形 の隆起を側面に連続して付ける。 脚部はやや幅が狭く傾り消え、壁面 が直線である。脚部は直線の附加 足型。調文は直線。	○	△	△	○	黒褐色	良好	加賀利E 3古~中	
4	S301 No.12 No.49	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 1/2	27.7	-	(16.4)	692.1	縦長の棒形、口 縫は平行。	底頂部の直角突起を重心に口沿部に 横帯の内凹部を大きく複数ついて 区切る。直角突起はやや幅があり、 側面は直線である。地紋は直線。	○	△	△	○	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
5	S301 No.43 土器 部片	調文 土器	深 鉢	-	-	-	144.8		大きく述べる状 況口縫。	二重陶輪により直角突起が描かれる。 地紋は直線。	○	△	△	○	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
6	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	72.3		大きく述べる状 況口縫。	二重陶輪により直角突起が描かれる。 地紋は直線。	▲	▲	▲	▲	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
7	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	56.8		平縫。	口沿部直线上に太い横線2条に挟まれ た隆起がある。地紋は直線。	○	▲	○	○	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
8	S301 No.65	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 部片	-	-	67.4		平縫に斜向の突 起が付される。	脚部による横内凹形。内部は無文。 脚部は直線。	○	○	▲	▲	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	12と同一 個体の突 起部。
9	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 部片	-	-	55.7		平縫に斜向の突 起が付される。	脚部による直角突起。地紋は不明。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	12と同一 個体の突 起部。
10	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	60.3		大きく述べる状 況口縫。	底頂部に直角突起。太い後縫によ り区切る。地紋は直線。	○	▲	▲	▲	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
11	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	65.9		波状口縫。	口沿底上に範囲的直角突起。地紋不 明。	○	▲	▲	▲	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
12	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	脚部 片	-	-	31.5		やや内凹する。	みみずびれ状の細い直線により方 形の区画。内部に直線。調文直線。区 画外縫部直線。	○	▲	▲	▲	明褐色	良好	3新	
13	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	85.7		平縫。	口沿部は直角突起。調文に透し字の 区画を有し強調を上させた直線で表 している。地紋は直線。	○	▲	○	○	暗灰褐色	良好	加賀利E 3新	
14	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	309.3		縦やかに内凹す る。ややキヤリ バーパ。	底頂部に直角突起。以下脚部に は水利溝や直角突起が並ぶ。地紋は 直線。	○	▲	○	○	暗褐色	良好	加賀利E 3古~中	
15	S301 No.29	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	94.5		大きく述べる 直角突起。	口沿部は幅広の無文帶で脚部との 境に横溝が1条ある。以下脚部は 調文直線で表される。	○	▲	○	○	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
16	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	32.3		やや内凹する。	口沿直上に直角突起が並ぶ。以下直 線で表される。	○	▲	▲	▲	灰褐色	良好	加賀利E 3古~中	
17	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	29.3		やや内凹する。	口沿直上に直角突起を連続して描く。	○	▲	▲	▲	暗褐色	良好	加賀利E 3新	
18	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	45.2		やや内凹する。	口沿部から2本の直縫により直縫 の突起の文様を描く。地紋は直線。	○	▲	▲	▲	明褐色	良好	3新	
19	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	41.8		内凹する。	口沿直上に太い直縫がある。口沿部 は斜方向の突起が彫られる。口沿はほ ぼ直線で表される。地紋は直線。	○	▲	○	○	暗褐色	良好	加賀利E 3新	
20	S301 4区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	62.1		直縫的に開く。 直縫で直縫は 欠缺している。	口沿部には太い直縫により直縫 の区画が設けられる。内部に直線。調 文直線。地紋は直線。	○	○	○	○	明褐色	良好	加賀利E 3新	
21	S301 No.48	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	87.1		縦やかな複数口 縫。	口沿部は直線で表される。直縫の 内側で立てる。	○	▲	○	○	淡褐色	良好	加賀利E 3古~中	
22	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	43.8		口縫は端部付近 で内凹する。	口沿直上に端部付近で内凹する。 口縫直上には複数の直縫が並んで いる。	○	▲	○	○	暗褐色	良好	加賀利E 3古~中	
23	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	44.5		内溝 気味 に立 て。	口沿直上に字の形による交互 刻突文が並ぶ。以下太い直縫が並んで いる。地紋には直線。	○	▲	○	▲	灰褐色	良好	池谷文土 器	
24	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	35.0		内凹する。	口沿直上に直角突起の下位に円形の 刻突文が並ぶ。直縫を2条1單位で表さ せる。脚部には横筋。	○	▲	○	○	暗褐色	良好	池谷文土 器	28と同一 個体
25	S301 3区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	26.9		内凹する。	口沿直上に直角突起の下位に円形の 刻突文が並ぶ。直縫を2条1單位で表さ せる。脚部には横筋。	○	▲	○	○	暗褐色	良好	池谷文土 器	27と同一 個体
26	S301 2区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	19.6		直縫的に開く平 縫。	口沿直上に太い直縫がある。以下斜 方向に直縫が並ぶ。地紋には直線。	○	▲	○	○	灰褐色	良好	池谷文土 器	
27	S301 1区-1	調文 土器	深 鉢	口縫 脚部 片	-	-	32.5		直立する脚部。	地紋に縦方向の直縫を施した後、2 本の直縫を直立に屈す。	○	▲	○	○	灰褐色	良好	池谷文土 器	32と同一 個体

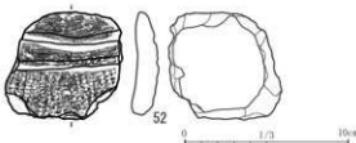


第8図 第1号住居跡出土遺物(3)

第4表 第1号住居跡出土土器観察表(3)

100 * 3

登記番号	注記番号	埋蔵	計測値				整形の特徴	整形の特徴	地土	白 色 石 膏 土 質	器色	性 別	型式 ・種類	備考									
			口径	底径	高さ	重量																	
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	-	-	-	43.1	直立する脚部。	地文に縱方向の条線を施した後、2本の足跡を弧状に描く。	○ ▲ ○ ◎	洗い緑色	良好	良	追加土文 器	31と同 個体									
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	-	-	-	26.7	直立する脚部。	地文に縱方向の条線を施した後、2本の足跡を弧状に描く。	○ ▲ ○ ◎	黒褐色	良好	良	追加土文 器	良									
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	86.0	口縁は強く内 曲し、端部は 平坦に見える。	斜方向の条線が強く描かれる。	○ ○ ○ ○	灰褐色	良好	良	曾利3										
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	56.4	大きくなり外 形が圓錐形。	口沿部に刷みを有する凸線が並ぶ。則 には丸く、地文は不明。	○ ▲ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	曾利3	22～24 同一個体									
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	74.1	大きくなり外 形が圓錐形。	口沿部に刷みを有する凸線が並ぶ。則 には丸く、地文は不明。	○ ▲ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	曾利3	22～24 同一個体									
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	66.1	脚部はやわら かに内凹し、脚 底は外反する。	脚方向の條線が意識され、条線は放射状 に描かれる。	○ ○ ○ ○	暗褐色	良好	良	曾利3カ										
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	43.0	直立する。	平行沈縫による条線を縱方向に集束化 され、直下手の脚部には筋状が残る。	○ ▲ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	曾利3	22～24 同一個体									
S301	2 K-1 3 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	71.9	内凹する。	口沿無文部には波状の沈縫、下脚部 との境に太い沈縫がある。地文は不明。	○ ▲ ○ ○	洗い緑色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	1 K-1 1 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	75.9	内凹する。	口沿無文部には波状の沈縫、無文部は 幅広で、脚部との間に太い沈縫が1条並 ぶ。地文は縱方向の乱れの条線。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	3 K-1 4 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	364.8	内凹する。	口沿無文部は幅広で、脚部との境に太 い沈縫が1条並ぶ。地文は横彫状工具を 用いて整形成した脚方向の条線。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	1 K-1 1 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	55.3	内凹する。	口縫は欠けてる。太い沈縫の下に坂面 方向の条線が乱れで描かれる。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	3 K-1 下唇 1 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	26.7	やや内凹気味。	割り消潜溝は開口した脚部によるクラン ク状の変形を縦に連続して描く。	○ ▲ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	2 K-1 1 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	40.7	直立する脚部 上部に脚部 に貫通する孔 を有す。	脚部はミカギ。孔は双方手貫通する。	○ ▲ ○ ○	明褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	1 K-1 1 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	17.0	内凹する。	断面M字状の二重隣縫により、S字の 曲線文様を描く。済手。	○ ○ ○ ○	黒褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	2 K-1 1 K-1	深鉢 土器	脚部 断片	-	-	27.2	やや内凹する。	口沿部に緩慢な脚部の条線が残る。条縫は 不規則。底下に横方向の沈縫1条並ぶ。	○ ▲ ○ ▲	灰褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	2 K-1 2 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	165.7	口縫は直進。	口唇から脚部にかけて無文で描かれる。	○ ○ ○ ○	褐色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	4 K-1 2 K-1	深鉢 土器	口縁 部断片	-	-	109.1	口縫は屈曲し、 脚部は直進。	初曲部に円形凹痕。口沿は無文で 脚部は直進。	○ ▲ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	6.6	(3.9)	平底。	脚部は「U」形による酒器や差し瓶が描か れてる下部は文字に収められる。地文は 縦の闇文。	○ ○ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	8.1	(7.5)	平底。	脚部は「U」形による酒器や差し瓶が描か れてる。地文は「H」形の複数溝。	○ ○ ○ ▲	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中										
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	7.6	(6.3)	199.1	底部は 丸みを帯びた 平底。脚部は 下端より大き く開く。	厚手。太い沈縫による割り消し瓶文 が描かれる。地文はRJ。縫文。	○ ○ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中									
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	5.7	(9.0)	203.8	平底。底部は 丸みを帯びた 平底。脚部は 下端より大き く開く。	厚手。太い沈縫による割り消し瓶文 が描かれる。地文はRJ。縫文。	○ ○ ○ ○	に赤い褐 色	良好	良	加曾利4 古3～中									
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	5.4	(14.8)	28.1	平底。脚部は やや外反した 小形の底盤。	内部ナメ艶無。 後立つ。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	良	加曾利4 古3									
S301	3 K-1 2 K-1	深鉢 土器	底部 断片	-	-	29.5	直立する脚部	脚部は交差突起文が1巡し。以下平 底。縫文に内凹横縫文が並ぶ。	○ ▲ ○ ○	黒褐色	良好	良	木本46										



第9図 第1号住居跡出土遺物（4）

第5表 第1号住居跡出土土製品観察表

施設番号	注記番号	種類	部種	残存	計測値			器形の特徴	製作の特徴	(cm・g)					
					口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)			白色 粒子	赤色 粒子	石 墨	褐色 色	型式 確認時期	備考
52	S301 一柄	土製 遺品	円盤 形	13.0 7.2 6.6 1.2 60.4				深鉢形土器口 縁部片を用いる。 全面に打ち欠きにより人為的な加工が施されている。 紐掛けの切り目は見られず、土器片錐とは異なる。	口唇下に波状の沈線。側部との 間に太い沈線を1条造りせる。以 下側部は、BLの網文を地紋とする。	○	▲	○	灰 褐色	や か な 細 質	加賀野E.3

土製品：出土した遺物の中で土製品と判断されたものは 52 の円盤 1 点である。深鉢形土器口縁部片を利用する。形状は不整圓形で、側面は打ち欠きにより人為的な加工が施されている。紐掛けの切り目は見られず、土器片錐とは異なる。

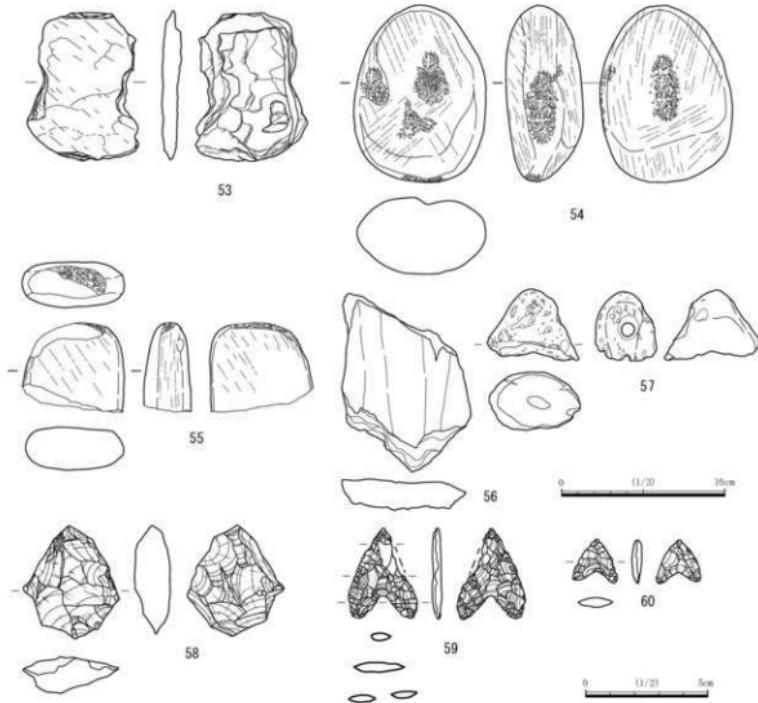
石器・石製品：石器では分銅形の打製石斧 1 点、スクレーパー 1 点、石鎌 2 点、磨石・凹石 2 点、石皿片 1 点、軽石製石製品 1 点が出土している。観察は第 6 表に示した。産地の同定を行ったものではないが、板状のチャートを用いる石器 58・60 が含まれることが特記される。これについては後述する。

53 は分銅形を呈する打製石斧である。素材には片岩が用いられており、筑波山系の在地産石材と判断した。側面の剥離は粗雑である。

54・55 は磨石・敲石である。側面を磨面とし端部に敲打痕が見られる。石材はいずれも凝灰質安山岩である。56 は上面に磨り面が確認され石皿と判断した。長瀬や群馬県甘楽川流域に見られる結晶片岩系の石材である。

57 は軽石製石製品である。多孔質で発泡による孔が多数見られる。形状は双耳壺の把手様の形状で側面から貫通孔が通り、内面からもこの孔に三叉状に連結される。内面はあたかも土器の器面に貼付された把手が剥落したように曲面を呈し、全面ケズリによって整形される。赤彩等は見られない。

58～60 は剥片を素材とした石器である。58 はチャートのスクレーパーとしたが、表裏ともに多方面からの剥離が施され、断面形は紡錘形を呈する。有舌型石鎌を意識する石鎌未成品の可能性がある。材質はチャート。59 は黒曜石製の石鎌である。大形で側縁は内湾する。脚部は緩やかな「V」字の抉りによって作出され、長脚気味となる。なお、同遺物は本住居跡の掘り込み外から出土している。遺構確認作業時に壁際に近いことから本遺構出土として取り上げたので、本遺構出土遺物とともに掲載している。形状から古い段階の石鎌の可能性がある。60 はチャートの三角形石鎌で縦横の比率が正三角形近い。薄い板状の原石から剥がされた剥片を利用するものであろう。抉りは浅い「V」字形。



第10図 第1号住居跡出土遺物(5)

第6表 第1号住居跡出土石器観察表

番 号	注記番号	種類	器種	既存	計測値			器形の特徴	形態の特徴	材質	備考	
					縦	横	幅					
53 No.38	S101 No.38	石器	打製石斧	既存 完形	9.0	6.6	1.0	78.5	分岐形。	雲母片岩	つくば山系	
54 No.23	S101 No.23	石器	磨石・轍石・凹石	既存	10.8	8.1	4.8	563.9	上下両面に鏡面板。上面のみ凹み。全面磨り削痕。	磁灰質安山岩		
55 No.39	S101 No.39	石器	磨石・轍石	1/2 (5.1)	6.3	2.8		128.4	両側面磨り底。	磁灰質安山岩		
56 2区	S101 2区	石器	石皿	既存	10.8	7.8	1.5	190.6	上面部のみ摩滅感が見られる。	結晶片岩又は 雲母片岩	長寿系	
57 一括	S101 一括	石器	軽石製品	軽石 (5.2) (5.4)	3.6		11.9	浅縁把手型 圓筒に貫通孔。内面から腹直筋が穿たれる。深 くの取っ手部に掘る。全面に磨形。	軽石			
58 S101-No.30	S101 No.30	石器	スクレーパー	既存	4.4	3.8	1.4	29.5	剝片形。	削痕から、既加工を施し、刃部削出。	チャート	
59 No.○	S101 No.○	石器	石鏟	既存 完形	3.6	2.6	0.4	2.5	バード型。	削痕・齿欠缺。両側は内角。脚部は深く抉り込まれる。	黒耀石 高原山系	
60 No.1	S101 No.1	石器	石鏟	完形	1.6	1.8	0.4	0.9	バード型。	両側は深く抉り込まれて脚部が短い。	チャート	

2号住居跡

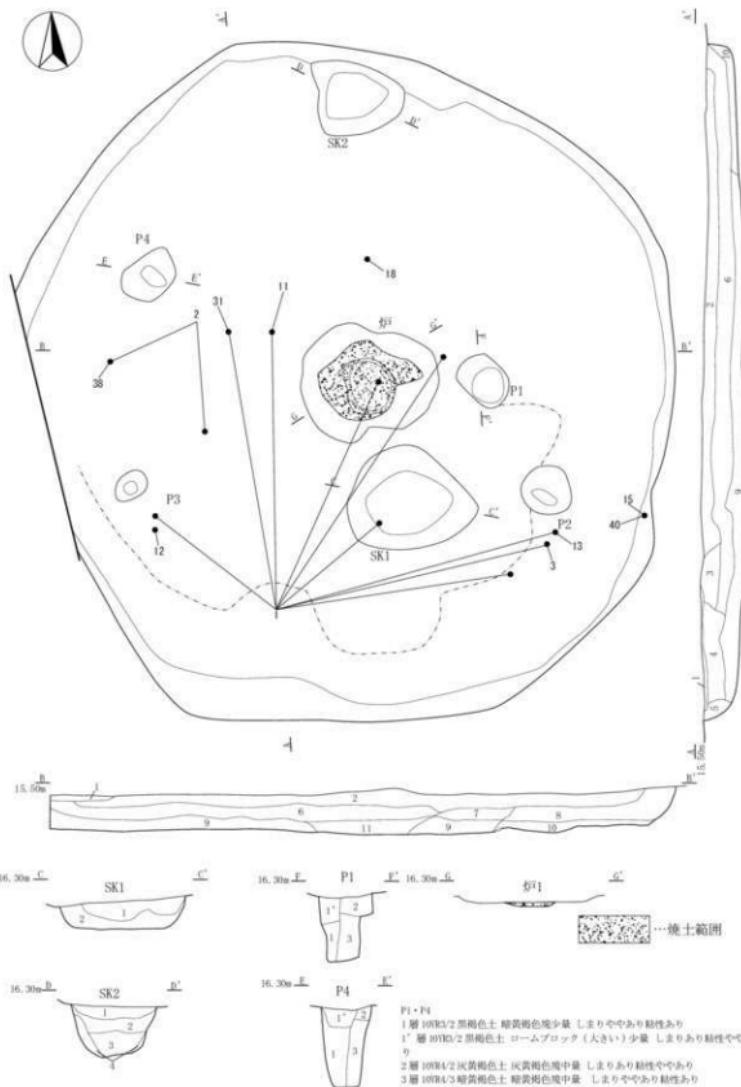
検出位置：本遺構は第2区の中央において検出された。平面形状：北西・西・南西側がやや角を成しているため五角形に近い形状となる。規模：南北方向に最大長を有し、 555.8×519.1 cmを測る。確認面下の掘り込みは37.8 cm。壁形状：北側の壁でやや急激に、南側では緩やかな立ち上りとなる。また、壁溝は検出されていない。覆土：8層に分割され、概ね自然堆積と判断される。床面：若干の凹凸があるもののほぼ平坦に踏み固められ、全面に硬化している。ただし破線で示した床面の外側はわずかに高まりをみせ、硬さもやや劣るが、段差を持った遺構と捉えることはできなかった。柱穴：4本検出されている。各柱穴の計測値および形状は、P1：47.4 × 38.9 × 55.0 cm、隅丸方形。P2：43.0 × 41.0 × 59.6 cm、円形。P3：30.4 × 20.4 × 20.0 cm、楕円形。P4：45.6 × 32.8 × 65.9 cm、不整楕円形。P1・P2・P4は掘り込みが明瞭で主柱穴と捉えられるが、P3は浅く他とは異なる。P1・P4で断面観察を行ったがいずれも柱痕跡が見られた。土坑：床面上において確認された柱穴状の掘り込みとは異なる大きさ、深さのものを住居内土坑として調査を行った。中央炉南側にSK1が、北壁際でSK2が検出されている。平面形状はいずれも隅丸の三角形を呈する。規模はSK1で $106.4 \times 85.3 \times 26.8$ cm、SK2では $83.2 \times 63.9 \times 42.6$ cmを測る。ともに遺物は縄文土器片が少量出土したのみで、埋設に係る遺構ではなかった。炉：住居のほぼ中央に瓢形の掘り込みとして捉えられた。掘り下げの結果、中央部分が円形に1段深く掘り窪められ、内部に焼土が充填していた。数片であるが、焼土を取り囲むように土器片が埋め込まれており、炉帶土器の可能性が高い。規模は 113.5×89.8 cmで、中央部分に 46.8×40.0 cm楕円形の掘り込みを有す。焼土はこの中心部分のみに円形に検出されている。深さは住居床面から10.2 cmを測る。

1層 7.SIM2 黒褐色土 ロームブロック・粒子多量 しまり粘性ややあり	9層 7.SIM3/4 黒褐色土 ロームブロック（大きい）多量 しまり粘性ややあり
2層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック・粒子多量・黒色土少量 しまり粘性ややあり	10層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック・粒子中量 しまり粘性ややあり
3層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック2層より小さい 黒色土少量 しまり粘性ややあり	11層 7.SIM3/2 黑褐色土 ロームブロック・粒子中量・粒子多量 しまり粘性ややあり
4層 7.SIM3/4 黑褐色土 3層より暗い 烧土粒子微量 しまり粘性ややあり	1層 10IM5/4 黑褐色土 ロームブロック少量 しまり粘性ややあり
5層 7.SIM3/4 黑褐色土 3層より少し明るい しまり粘性ややあり	2層 10IM5/4 黑褐色土 ローム粒子中量 しまり粘性ややあり
6層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック・粒子多量・黒色土少量・焼土ブロック微量 しまり粘性ややあり	3層 10IM6/4 黑褐色土 ロームブロック（大）少量 しまり粘性ややあり
7層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック・粒子多量・黒色土中量・焼土中量 しまり粘性ややあり	4層 10IM6/2 黑褐色土 しまり粘性ややあり
8層 7.SIM3/4 黑褐色土 ロームブロック・粒子多量・黒色土少量 しまり粘性ややあり	

出土遺物

本遺構から出土した遺物は、掲載土器資料45点、重量7,143.1g、掲載石器資料10点、626.9g、未掲載土器25,384.1g、礫34.3gである。詳細については観察表にまとめた。

土器：1～15は深鉢で、口縁部に隆線や太い沈線、または二重の隆線をもって窓枠状の区画を作るものである。1は住居中央やや南東側から出土の接合資料である。口縁部には横帯の円形区画が、崩れた満巻文様を起点に隆線によって描かれる。胴部には磨消懸垂文が垂下し、地文にはRL縄文が稍円区画内を含め縦方向に整然と施文される。2は西側出土遺物が接合したもので、口縁部の満巻文は幅広の無文帶へと移行し、満巻の名残りが沈線となって弱く描かれる。胴部は2本の沈線による懸垂文が垂下するが、磨消帶は見られない。地文はやはり縦回転のRL縄文が整然と施文される。3～6は高い凸線によって満巻文状の区画を描くもので、二重の隆線または沈線を伴うものもある。7～15はやや低い隆線により横帯の満巻文が描かれ、隆線には指による太い沈線が付随する。楕円区画内の縄文は磨消手法を示すものであるが、充填的な施文後に縁



第11図 第2号住居跡

辺を再び撫でるものも存在するようである。3は附加条第1種RL+R、13・15は地文が区画内で横回転のLR縄文、胴部は整然とした縦回転の施文で施文方向の変換が見られる。

16・17は口縁部直下にまで縄文が施文されるもので、口辺に横帯の区画は設けられない。16は波状口縁を呈するもので、突起の頂部から口唇にかけて「の」の字を描く沈線が連繋する。17では口唇直下に沈線を1条巡らす。18は胴部の破片である。蕨状の文様が隆帶により貼付される。

19～23は上端がやや平坦になる逆「U」字形の文様区画が、沈線によって描かれ19ではLRの撫糸文が区画内部に施文される。20では「U」字区画は直線的な沈線によるもので、まだ方形の区画となっている。21では磨り消し帶頂部が逆「U」字になり区画帶外に縄文を施文する。22では逆「U」字の文様が太い2本の沈線で描かれ、沈線間は磨り消される。口縁部に無文帶沈線下に、23・24では太い沈線が曲線的に描かれるもので、曲線間は磨り消される。24は渦巻文が描かれる。区画内には縄文が充填様に施文される。外部は磨り消される。

25～33は連弧文系の土器である。25では胴部に櫛歯状工具による波状条線が垂下する。26では口縁部無文帶の直下に沈線が1条巡り、以下に「C」字状の竹簡による刺突列が施される。27～29では口辺部無文帶部分に円形の刺突が2列巡る。以下胴部は27でコンパス文様の竹簡が横位に描かれる。28～32では地文に縦方向の条線が密接して施文されるものである。30は波状の口縁部、31～33は外反する屈曲部分の破片で、胴部中位付近に横方向の沈線が巡り胴部の上下を画している。明瞭な弧線を描く資料は30・33の2点のみで他は地文の縦施文から連弧文系土器と判断した。33ではLの撫糸文が地文となっている。

34は縦方向の刻みを持つ隆帶が垂下する資料で曾利3式土器と判断した。

35は双耳壺把手部分の破片である。胴屈曲部に付されるもので、本遺構ではこれ1点のみであった。

36は有孔鉗付土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁は短く外反し直下に鉗状の肩部が張る。孔または把手は見られないが、器面は細かに磨かれ、薄手である。赤彩は施されない。

37は鉢もしくはやや浅い鉢形土器の胴部下半の資料である。胴下半に2条の微隆帶に縁取られる磨消縄文が施文されるもので、加曾利E4古段階に相当する遺物である。

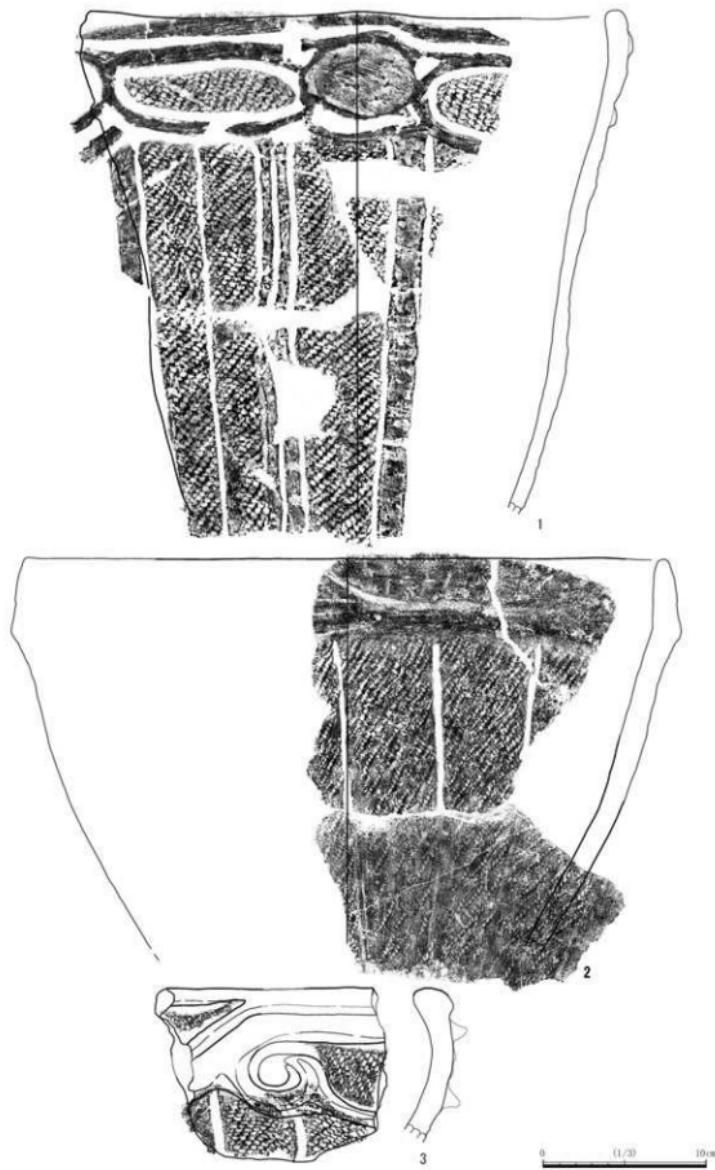
38は嘴状を呈する突起部分で、沈線による縁取りがなされ、円形刺突が付随する。南関東大宮丘陵に見られる嘴状の突起の一形態と判断した。39も突起部分の破片で、頂部に「の」の字の沈線が描かれる。

40～42は加曾利E3～4式段階の底部である。胴部が下端より大きく開く40・41、やや直立気味になる小形の42などがある。

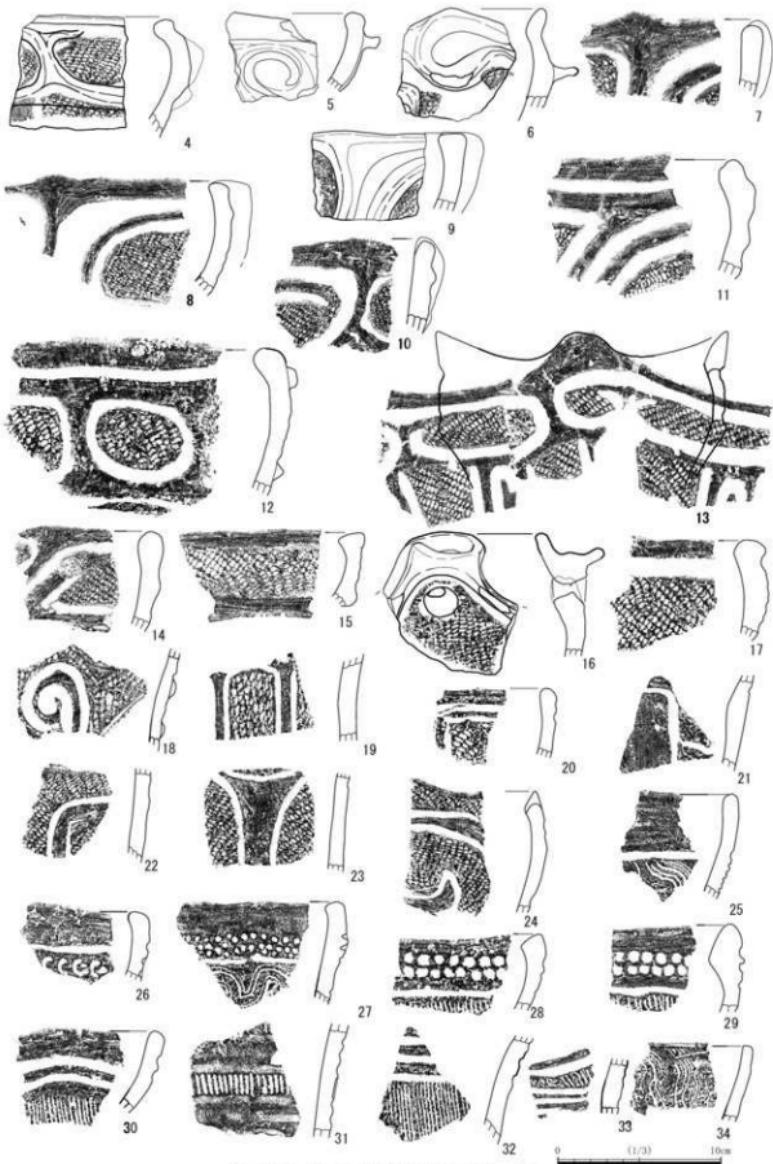
43・44は曾利3式土器である。43では円形の刺突が交互に施文され、胴部には渦巻文を意識した集合沈線が描かれる。44では条線地文に刻みを有する隆線が垂下する。

45は井戸尻1式新段階の遺物把手部分であろう。中期最終末とは異なる遺物で、混入資料と判断した。46も同様に中期前半～中葉の阿玉台II式前後の環状把手の細片である。

47は薄手の内湾する胴部の破片である。粒子が粗く砂粒の混入が目立つ。器面には指による曲線文様が描かれ、微隆帶状に残された部分のみに縄文が残される。後期安行式期の可能性のある唯一の破片である。



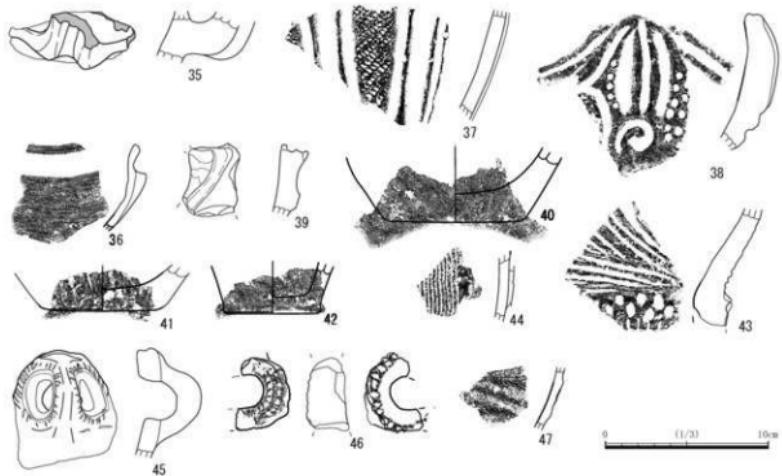
第12図 第2号住居跡出土遺物(1)



第13図 第2号住居跡出土遺物（2）

第7表 第2号住居跡出土器観察表(1)

器種 番号	注記番号	種類	基盤 現存	計測値			器形の特徴	器形の特徴	土色			器形	焼成	型式	備考						
				口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)															
									白色	石	黒										
1	S102 No.02・03・ 08・10～12・ 14・15・18 1K・2K～一括	圓文 土器 深 縁	深 縁	1/3	32.1	-	(31.5) 2105.0	平縁。やや内 溝する。脚下 半部欠損。	口沿部に施墨かまぼこ状の丸い縦縞で 墨の区画を設ける。区画は特に円形が 突出し、円形内部には墨が塗かれ るものが複数円形区画内には、既に火痕 される。脚には脚に磨り消す、墨文が 残りし。既、墨文が被施方向に回転施文され る。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
2	S102 No.07・13 二区 三区一括	圓文 土器 深 縁	深 縁	脚部	39.0	-	(23.6) 1403.2	やや内 溝し。 頭部で外反す 後、口辺は 立ち。	口沿部に施墨帶を施せ。口の面にハ止 の線を施す。脚部には2本の沈縫二重 の墨文を施す。脚部に既の墨文跡と 被施方向に回転施文される。脚下端部は 人為的に引き抜き、残されている。理設 土器と考えられる。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
3	S102 No.02	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	363.7	やや内 溝し。 頭部で外反す 後、口辺は 立ち。	口沿部に接着による横縫の区画を設け、 墨文を配す。脚部に太い火痕が施されし 後、墨は既、墨。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
4	S102 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	103.3	キャリパー 削 を施す。	口唇直下に墨縞が二条並び、横縫区画は 太い墨縞。頭部は幅の狭い腰けし墨縞。 既が施す。墨は既。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
5	S102 1K～ 2K～一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	53.1	キャリパー 削 を施す。	口縫直下に墨縞が同り、横縫区画は太い 墨縞。区画内には墨が施されし。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
6	S102 4区～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	87.8	波状口縁	口縫部に墨縞により横縫の区画を設け、 墨文を施す。脚部は既。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
7	S102 3区～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	67.3	小突起部。	かまぼこ状の墨縞により区画される。内 面には既の被施墨文が施文される。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
8	S102 2K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	126.1	小突起部。	脚面二角部の墨縞により区画。内部に即 墨文を施す。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
9	S102 確認面一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	87.0	小突起部。	かまぼこ状の墨縞により区画される。内 面には既の被施墨文。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
10	S102 1K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	81.2	直縁的に聞く。	長い斜縞により重ねて横縫区画。墨紋は 既、墨。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
11	S102 No.10	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	136.2	内溝する。	墨縞は低くかまぼこ底で二層になる。区 画内單列の墨。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
12	S102 No.6	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	284.3	内溝する。	かまぼこ状の墨縞により横縫区画が描か れ。中央に指円形の墨画となる。地紋は既。	▲	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
13	S102 No.15	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	17.9	-	(9.0) 202.5	内溝し。墨縞 は既。	太い沈縫により横縫区画を描き、底部墨 縞は既。墨縞が厚。	▲	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中						
14	S102 確認面一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	66.6	内溝する。	直縫部は太い直縫。口縫部は太い直縫によ る区画部が描かれて。内部に即、墨文が施文 される。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
15	S102 No.1	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	74.0	内溝する。	口縫部は直縫。口辺に低いかまぼこ状斜 縫部を貼り付け区画を行う。内部に即、墨文 が施文。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3古～中					
16	S102 1K	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	80.6	波状口縁。内 溝する。	直縫部に太い直縫での字を描く。 波状に内からかまぼこ帶が帶たれる。墨紋には 即の墨文が施文される。	▲	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
17	S102 1K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	46.3	内溝する。	墨縞は玉筋状になり、口唇直下に太い沈 縫が施る。地紋即。	○	○	○	▲	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					
18	S102 確認面2	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	122.2	やや外反す。 而後逆に	墨縞による墨文が貼り付けられる。地 紋は無筋。	▲	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3新					
19	S102 3区～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	47.2	やや外反。火 炎文。	太い沈縫により、墨縞が方形の区画を設 け内部に即の墨文が施文地紋になる。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3新					
20	S102 3区～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	47.2	内溝して立つ。	太い2本の墨縞で口縫直下に既「十」字区 画。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3新					
21	S102 1K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	29.1	内溝する平縫。	口縫直下に既墨文帯を配した後、既「十」字 区画により区画した墨文を配し、即墨文が施文す る。	○	○	○	○	明褐色	良好	加賀利正 3古～中					
22	S102 4区～ 一括	圓文 土器 深 縁	脚部 片	-	-	-	31.7	外反屈曲。	太い沈縫によ。方型の区画。磨り消し墨 文。	○	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3新					
23	S102 2区～ 一括	圓文 土器 深 縁	脚部 片	-	-	-	-	やや外反する。	太い沈縫によ。方型の区画。磨り消し墨 文。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3新					
24	S102 2区～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	57.1	キャリパー 削 を施す。口縫 は平縫。而 既柱を有す。	二角形の底部に既墨文帯により区画した墨 文を配し、即墨文が施文する。	○	○	○	○	褐色	良好	加賀利正 3新					
25	S101 1K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	69.9	内溝する。	口唇直下に無墨帯を施した後、竹管によ る「C」字の刻印が施す。	○	○	○	○	灰褐色	良好	漆弘文 系々					
26	S101 1K～ 一括	圓文 土器 深 縁	口縁 部片	-	-	-	37.6	内溝する。	口唇直下に無墨帯を施した後、竹管によ る「C」字の刻印が施す。	▲	○	○	○	灰褐色	良好	加賀利正 3古～中					



第14図 第2号住居跡出土遺物(3)

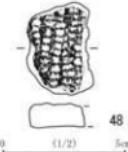
第8表 第2号住居跡出土土器観察表(2)

陶器番号	注記番号	種類	器種	計測値			器形の特徴	整形の特徴	断土				焼成	型式	断層時期	備考		
				口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)			白色 粘子	赤色 粘子	石 黄石	漆色						
									○	○	○	○						
27	S102 2区-粘 土器	深鉢	口縁 部片	-	-	-	50.2	内湾する。	口唇直下に無文帯を配した後、2個の刃状突起が沿る。脚部は縱方向の脚系1を地紋とする。	○	○	○	○	黄褐色	良好	遼弘文系カ		
28	S102 2区-粘 土器	深鉢	口縁 部片	-	-	-	50.2	内湾する。	口唇直下に無文帯を配した後、刃状突起が2つある。脚部は縱方向の脚系2を地紋とする。	○	▲	○	○	褐色	良好	遼弘文系カ		
29	S102 1区-粘 土器	深鉢	口縁 部片	-	-	-	51.2	直口縁。内湾する。	口唇直下に無文帯を配した後。大きい沈線が2条ある。脚部は縱方向の脚系2を地紋とする。	○	○	○	○	に赤い 灰褐色	良好	遼弘文土器		
31	S102 2区-粘 土器	深鉢	脚部 片	-	-	-	55.7	やや外反する。	地紋に纵方向の脚系による脚突起を複数有する。脚部は縱方向の脚系2を地紋とする。	○	○	○	○	明灰褐色	良好	遼弘文土器		
32	S102 2区-粘 土器	深鉢	脚部 片	-	-	-	30.1	やや外反する。	地紋に纵方向の脚系による脚突起を複数有する。脚部は縱方向の脚系2を地紋とする。	○	▲	○	▲	明灰褐色	良好	遼弘文土器		
33	S102 2区-粘 土器	深鉢	脚部 片	-	-	-	24.2	やや外反する。	地紋に纵方向の脚系による脚突起を複数有する。脚部は縱方向の脚系2を地紋とする。	○	▲	○	○	褐色	良好	曾利3		
34	S102 2区-粘 土器	深鉢	口縁 部片	-	-	-	25.3	内湾する。	無文帶を持たず直口縁下に横方向に脚部2を有する。	○	▲	○	○	明灰褐色	良好	加曾利E.3 古~中		
35	S102 2区-粘 土器	双耳 壺	把手 部	-	-	-	81.5	傾伏を呈する。	上面は太い二重縁線。	○	▲	○	○	に赤い 褐色	良好	加曾利E.3 新		
36	S102 2区-粘 土器	双耳 壺	口縁 部片	-	-	-	30.0	脚部は大きめ内湾する。	口縁は直口縁で手縫縫合で組み立てられる。	○	○	○	○	明灰褐色	良好	加曾利E.4		
37	S102 1区-粘 土器	有孔 門付 土器	脚部 片	-	-	-	62.1	縦やや内湾する。	二重脚縁線が並んでおり、脚部下半分の資料。	○	○	○	○	に赤い 褐色	良好	加曾利E.3 中		
38	S102 No.13	圓文 深鉢	嘴突 突起 部	-	-	-	104.3	縦やかに内湾し、嘴突に立つ。	波頭部より太い脚突起が対称状態で中央に引かれれば波頭で脚部2本の二重脚縁線を表現する。脚部には三叉文及び円形刻印突起が施され、波頭部直下には無文帯が配される。	○	▲	○	▲	褐色	良好	曾利3		
39	S102 4区-粘 土器	深鉢	突起 部	-	-	-	24.4	円錐状に突出する。	脚部に向かって斜方向に垂下する。	○	○	○	○	に赤い 褐色	良好	加曾利E.3 古~中		
40	S002 No.01	圓文 深鉢	底部	-	8.1	(4.7)	381.5	やや丸みを帯びた 底。	脚部は下端よりやや聞いて立つ。鉢形か。	○	▲	○	▲	に赤い 褐色	良好	加曾利E.3 古~中		

第9表 第2号住居跡出土土器観察表(3)

陶器番号	注記番号	種類	器種	残存	計測値			器形の特徴	形態の特徴	粘土				焼成	型式	経年時期	備考
					口径 (mm)	底径 (横) (mm)	器高 (mm)			白色 粒子	赤色 粒子	石 英	輝 石				
41	S102 2区-括	調文 土器	深鉢	底部	-	7.2	(2.9)	82.3	ややえみを帯びた平底。胴部下端はソリによる磨り消し魅惑文が彫刻される。	○	▲	○	▲	にぶい 褐色	良好	加賀利E 3古~中	
42	S102 2区-括	調文 土器	深鉢	底部	-	5.7	(3.0)	66.2	平底。器面上に並列の溝がある。	○	○	○	○	にぶい 褐色	良好	加賀利E 3古~中	
43	S102 1区-括	調文 土器	深鉢	胴部 片	-	-	-	84.3	胴部は段階で開く。	○	○	○	○	褐色	良好	曾利3	
44	S102 2区-括	調文 土器	深鉢	胴部 片	-	-	-	11.6	注目直立する。	○	▲	○	▲	褐色	良好	曾利3	
45	S102 1区-括	調文 土器	深鉢	把手 部	-	-	-	69.7	対称する把手の小形把手。内側気眼に立ち、	○	○	○	○	にぶい 褐色 所領の 金賞印 深入	良好	芦戸尻3	
46	S102 No.05	調文 土器	深鉢	縦状 把手	-	-	-	22.6	器底を呈する。	○	○	○	○	にぶい 褐色 少量の 金賞印 深入	良好	阿玉台式 E-b	
47	S102 確認面-括	調文 土器	深鉢	口辺 部	-	-	-	8.9	内側する。	○	▲	○	○	にぶい 褐色	良好	安行1a	

土製品：48は土器片錐である。梢円形を呈するものであろうか、半分に破損する。深鉢胴部の破片を利用することで、片側面に紐掛けの溝がある。本遺跡121,696.5gの遺物で、1点のみ確認できたもので、当該時期に土器片錐が極端に減少する傾向が見られる。



第15図 第2号住居跡出土遺物(4)

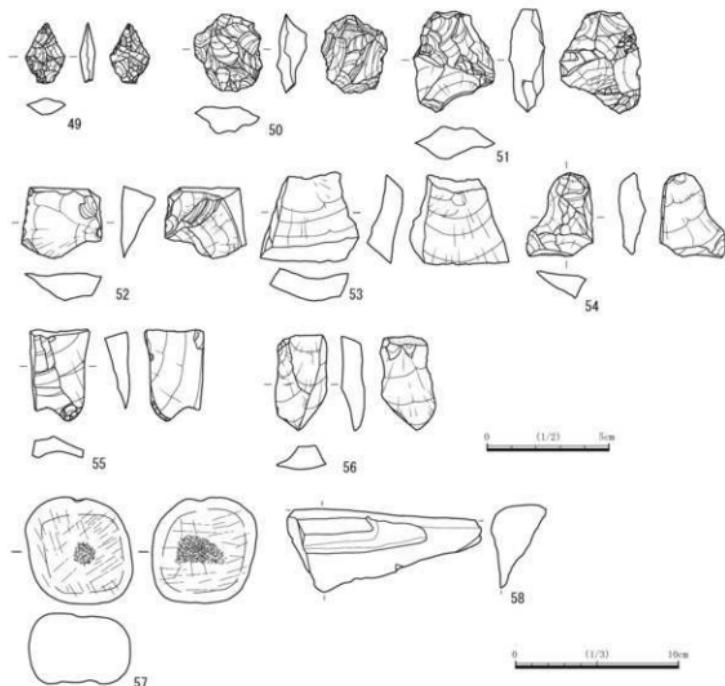
第10表 第2号住居跡出土土製品観察表

陶器番号	注記番号	種類	器種	残存	計測値			器形の特徴	形態の特徴	粘土				焼成	型式	経年時期	備考
					口径 (mm)	底径 (横) (mm)	器高 (厚さ) (mm)			白色 粒子	赤色 粒子	石 英	輝 石				
48	S102 4区-括	土製品 片縫	土器	1/2	3.8	2.6	1.0	12.6	やや内凹。胴部片再利用。	○	▲	○	▲	褐色	良好	—	

石器・石製品：49は有茎型石鐵である。基部をわざかに欠損するが、側面の最大幅部分が中央やや下半に位置し下半の側縁も直線的である。群馬県暗通寺・洞遺跡出土の中・小形分類の形態に類似する。材質はチャート。

50～56はやはりチャートの未成品もしくは素材剥片である。50は両極技法による石鐵の未成品であろう。一部分に節理面が残されている。51も両側面に二次加工が施され、打点部は礫面となっている。52・53は方形の剥片で素材剥片であろう。二次的加工痕は認められない。54～56は長方形の剥片で、両端部が節理面になっている。この他にチャート製の剥片・チップは組成表に示したとおり出土しておらず、石鐵製作にかかる素材のみを集落内に持ち込んだものと判断される。

57はやや扁平な立方体を呈する。輝石安山岩製の磨石である。全面に擦痕状の磨り痕が見られ、上下両面に敲打による窪みがある。58は石皿の破片であろう。雲母片岩製で側縁部が縁帶状に高まり内面は緩やかに窪む。破断面への加工痕は見られず、側面及び内面に擦り痕が確認される。長瀬系の石と判断している。



第16図 第2号住居跡出土遺物（5）

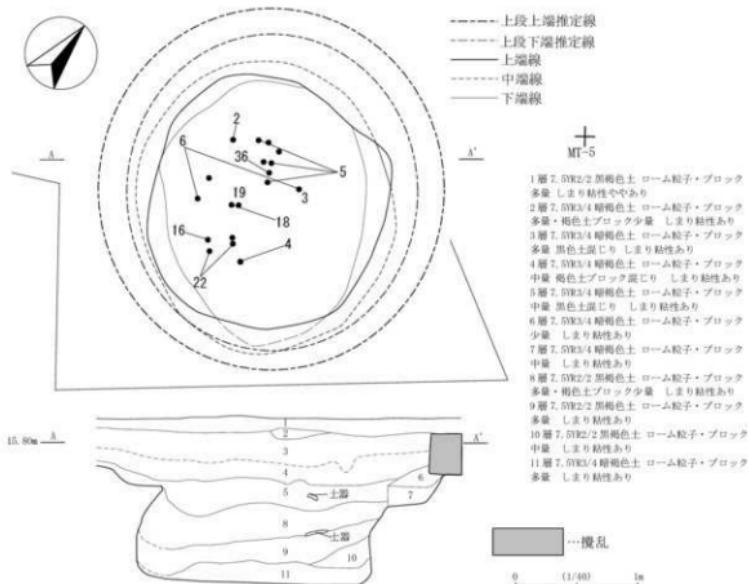
第11表 第2号住居跡出土石器観察表

規範番号	注記番号	種類	器種	計測値				器形の特徴	形態的特徴	材質	備考	
				幅	横	幅	重量					
49	S102 No.19	石器	石器 石器	基盤 （2.5）	（1.6）	0.6	1.8	有茎。基部斜傾。	両側面から丁寧な押圧削離を行う。	チャート		
50	S102 2区一括	石器	被	完形	3.1	2.7	1.2	9.1 （石器未完成品）	ビエス・エスキ ユ石器未完成品。	基盤基部および表面に表皮を残す。	チャート	板状の原石
51	S102 2区一括	石器	残根	完形	4.2	3.3	1.4	18.3	剥片を剥した痕 剥離多數。	剥片除去後一次的剥離を行ない加工窓が見られる。 スクレーパー未完成品。	チャート	板状の原石
52	S102 2区一括	石器	剥片	完形	2.8	3.2	1.3	12.7	方剣。	自然断面を打点とし縱方向に連續的に剥がさ れている。	チャート	板状の原石
53	S102 1区一括	石器	剥片	完形	3.7	4.0	1.4	17.7	方剣。	自然断面を打点とし縱方向に連續的に剥がさ れている。下端及び右側面にも断面面となる。	チャート	板状の原石
54	S102 2区一括	石器	剥片	完形	3.3	2.6	1.8	8.9	縱長。	自然断面を打点とし縱方向に連續的に剥がさ れている。外側面にも断面面となる。	チャート	板状の原石
55	S102 4区一括	石器	剥片	完形	3.7	2.4	0.9	8.6	縱長。	自然断面を打点とし縱方向に連續的に剥がさ れている。	チャート	板状の原石
56	S102 1区一括	石器	剥片	完形	3.8	3.0	1.1	8.9	縱長。	自然断面を打点とし縱方向に連續的に剥がさ れている。	チャート	板状の原石
57	S102 1区一括	石器	磨石	完形	6.6	6.6	4.2	288.2	扁平な立方体。	上下両面に瘤が付いたる。全面摩耗。	軽灰質安山岩	浅間山系
58	S102 2区一括 下層一括	石器	石器 石器	側縫 縫合	5.0	11.9	3.3	252.7	板状の石器の側縫	やや丸みを帯び上面は淺く窪む。破断面も含め 裏面は研削に用いられる。軽用砾石。	結晶片岩	長野系の石

第2節 土坑（SK）

・第1号土坑

検出位置：2区の南東隅において検出された。平面形状：当初、調査区の南東隅に一部が確認され、調査区域の関係上1/3程度に留まっていたが、後の協議で遺構全体が調査対象となった。遺構確認段階から同地区には浅い平坦面がテラス状に広がり、さらに中央部分に円形でやや袋状を呈する掘り込みを有することが判明していた。床面：平坦部分は底面が硬化しており、住居の床の可能性があると判断し更に掘り広げた。しかしながら、平坦部はやがて表土直下層に削平され明確な立ち上がりの検出には至らなかった。一部調査区との境部分で確認された断面の観察により、部分的テラス状の立ち上り部分を検出したものの全体を確認するには至ってない。図上では同心円状の推定線として表したが明確なものではない。この平坦部分からは柱穴・炉ともに確認されておらず、住居とは明瞭に異なる。規模：外郭の平坦部分で最大径およそ300cm、下端で240cm、土坑の開口部は237.8×214.5cm、中端は236.2×204.4cm下端は214.1×164.6cmを測る。確認面下の掘り込みは101.9cm。壁形状：北側の壁でやや急激に、南側では緩やかな立ち上りとなる。中心土坑部分の断面形は袋状と言える。また、壁溝は検出されていない。覆土：10層に分割される。断面図で示した第4層が覆土の上層で第11層まで分層される。概ね自然堆積と判断される。



第17図 第1号土坑

遺物

遺物は第5層に集中しており土坑中心部に一括投棄されたとみるべきであろう。

出土遺物は掲載土器36点、8,819.1g、未掲載土器17,933.2g、掲載石器7点、2,320.4g、未掲載石器3点3.7g、総重量は29,076.4gを計る。

土器

1～11は深鉢形土器である。1～6は太い沈線による梢円区画を描くもので、満巻文は完全に消滅している。また、1・3では口縁部に舌状の突起が付される。他は平縁もしくはゆるやかな波状となる。3～11では隆帯による梢円区画が描かれるもの、「の」の字の文様・満巻文が描かれる。8では梢円区画内に縦方向の半截竹管が密に施文されるもので他とは異種であるが、信州系の郷土式とは異なる条線の充填である。胸部には円形もしくは弧状の沈線が磨消懸垂文帶間に描かれ、連弧文系とも異なっている。

深鉢形土器の地文は1・10で口縁部区画内と胸部が同じく縦回転を施文するもので1はLR縄文、10はRL縄文を用いる。一方、2・6・9では従来の加曾利E式土器の手法が採られ、区画内には横回転の充填的手法縄文が施文され、胸部には縦方向の回転施文が充填的に施されるものである。いずれもRL縄文を用いるが、9では0段多条の縄文を用いている。

12～20は蕨状の文様が縦方向に展開される土器である。器形的には壺または双耳壺を考えられ、浅鉢の可能性もある。大木系土器の影響であろうか、遺物量の割に大破片が多い。

21・22は加曾利E3式の深鉢底部資料である。ともに磨消懸垂文の幅は狭く、21は古い様相で縄文帯の中心に蛇行沈線が垂下する。地文にはともにRLを縦回転で用いている。

23～28は連弧文系土器である。23では口辺部無文帯直下に「C」字の、24・25では波状口縁直下の無文帯に交差刺突列が施文される。26では沈線を挟んで円孔列が刺突施文される。沈線はいずれも断面「U」字の滑らかな線で描かれ、地文には28ではRの撫糸文が施文される。その他は条線が縦方向に密に施文される。いずれも連弧文系土器でもやや新しい段階になる。

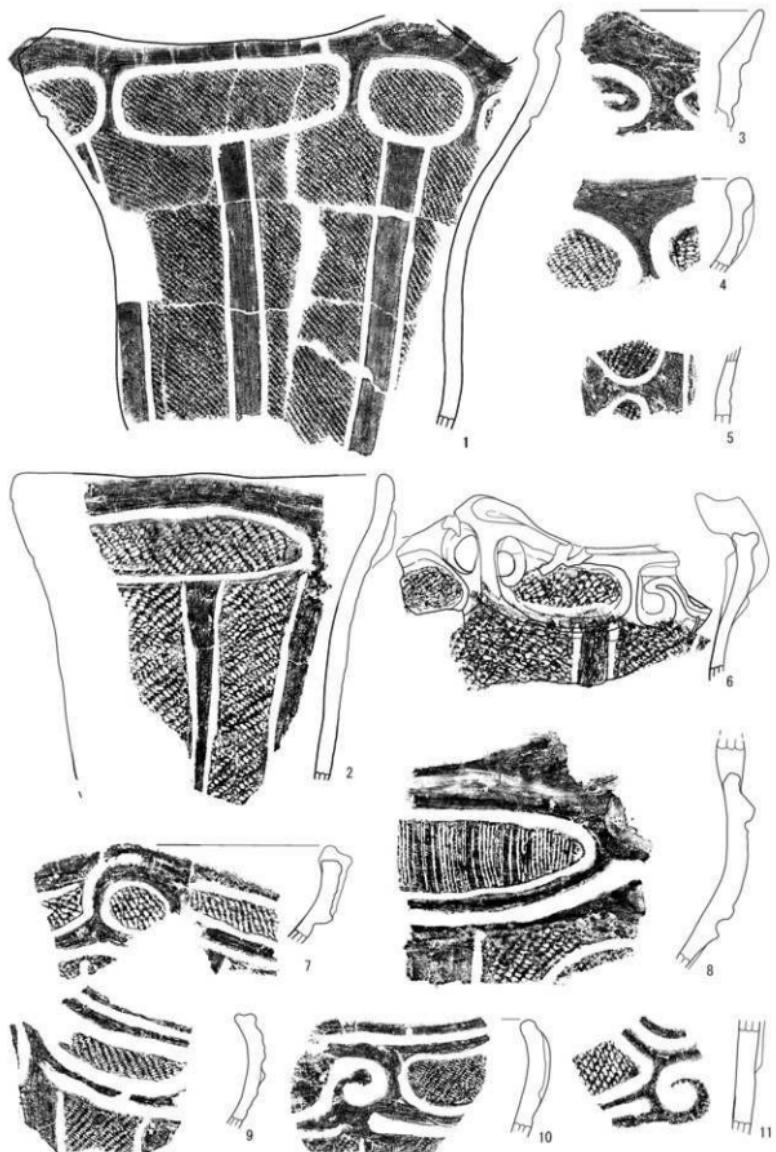
29は深鉢胸屈曲部に0段多条の縄文が縦方向に回転施文されるもので、加曾利E3式新段階の可能性がある。30は縦の磨消縄文が施文される土器であるが、地文に撫糸文が用いられる例で、大木系の可能性がある。31はキャリバー型の深鉢口縁部片である。縦方向にやや太い沈線で区画帯を設け、内部に細い沈線を満巻文が崩れたように描く資料である。富岡市の博物館で展示されたものがあるとの情報を得たが、詳細は不明である。信州系の土器とは異なる系統と考えている。

32は、加曾利E4式でも西日本の北白川上層式に類似する資料である。E3式よりもE3～4式新段階の可能性を指摘しておく。

33は内傾する深鉢口縁部の破片で口唇端部にまで太い沈線が斜方向に施文される。曾利3式。

34・35は鉢形の土器で口縁から底部まで器形が分かる資料である。34は連弧文式土器同様の手法で口縁無文帯直下に太い沈線を巡らせた後、地文にはLの撫糸文を密に施文する、一方、35は同様の器形であるが、口縁部文様帯を画す沈線はなく、口唇直下より平行沈線によるやや乱雑な条線が施文される。

37は底状の隆帯が口縁直下に貼付され、底の端部には刻みが施される。大木8a式並行の資料であろう。本遺構への混入遺物と判断される。



第18図 第1号土坑出土遺物（1）

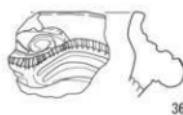
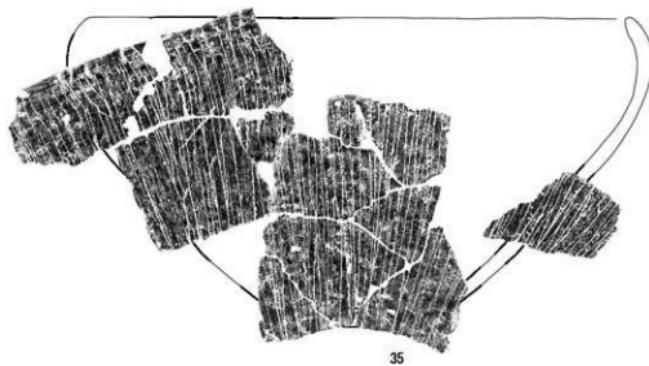
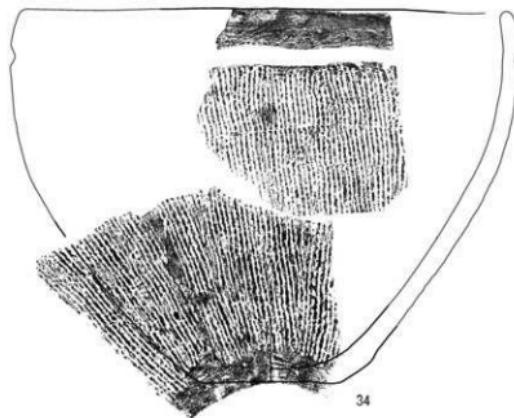
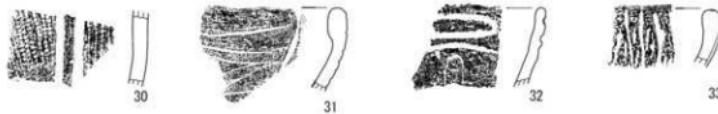
0 (1/20) 10mm



第19図 第1号土坑出土遺物（2）

第12表 第1号土坑出土土器観察表(1)

出 土 器 物 番 号	注 記 番 号	種 類	器 種	形制			器形の特徴	器形の特徴	胎土			施 色	型式	施属時期	備 考		
				径 存	底 径(横)	高 さ			白 色	石 英 子 子	黑 色						
									粘 土	石 英 子 子	黑 色						
SK01 No.11- 12+14- 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	33.3	-	25.6	899.6	やや開く口縁は、小波状突起を有する。	灰やかな陰面とそれに沿う浅縫が横円と円形の横筋区画を描く。区画内はE1調文。胴部は擦り消しで整文が残す。	○▲○	にぶい 黄褐色	良好	加賀利E.3 新				
SK01 No.07-2- 08	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	22.9	-	18.8	396.6	やや開く口縁は、小波状突起を有する。	灰やかな陰面が円形と円形の横筋区画を描く。区画内及び地文はE1調文。胴部は擦り消し整文が残す。	○○○○	灰黃褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
3	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	77.7	三角形の突起部。	(1)に指摘によるE1調文での字の漢文書刷の文様を描く。区画内は無文。	○○○▲	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
4	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	93.6	内凹する。平縁。	断面線やかな陰面が横筋区画を描く。区画内はE1調文。	○○○○○	暗褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
5	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	42.2	外反して立る。	擦り消し整文部内には、「匸」字の字面を上に對照させ。内部はE1調文。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
6	SK01 No.02- 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	306.6	内凹する。平縁。突起は極度で盲孔を有する。	断面線やかな陰面が斜坡部より「匸」字の字面の漢文書刷を描く。胴部には擦り消し整文。地文はE1調文。	○○○○○	浅い褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
7	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	141.2	内溝する。小凹状。	やや高い持ち手様が円形の横筋区画を描く。区画内は無文R調文。	○○○○○	浅い褐色	良好	加賀利E.3 新				
8	SK01 No.15	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	486.4	内溝する。口縁に山伏の突起。	(1)に無文部を有しE1調文による横筋の漢文書刷を対照する持刃羽の字が設けられ区内に縦方向の筋面によつて各條が構成される。胴部は斜坡部の断面より十字形が並下し、調文部部分に弧状又是渦巻形の沈調文が示される。地文はE1調文。	○○○○○	暗褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E 新			
9	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	136.0	内凹する。平縁。突起は極度で盲孔を有する。	断面線やかな陰面が斜坡部付近より口縁に連続する。口脣部はE1調文が示る。胴部には擦り消し整文。地文はE1調文。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
10	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	156.3	内凹する。平縁。突起は極度で盲孔を有する。	断面線やかな陰面が斜坡部付近より「匸」字の字面の漢文書刷を描く。胴部には擦り消し整文。区画内はE1調文。	○▲○○○	黒褐色	良好	加賀利E.3 古～中	金雲母多 量			
11	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	84.5	内溝気味に立つ。	大二重隆縫を貼り付け。済巻、垂下文様が描く。地文はE1調文。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E			
12	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	169.6	内溝気味に立つ。	大二重隆縫を貼り付け。済巻、垂下文様が描く。地文はE1調文。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E			
13	SK01 一括	調文 土器	太 鉢	口縁 鋸片	-	-	88.4	内溝し、頭部で盛して側面に開く。	頭部は無文となる。胴部上に平たい面による沈調文と通状の横筋区画を斜面に沿つて並んで開く。地文はE1調文。	○○○○▲	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
14	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	66.3	内溝気味に立つ。	大二重隆縫を貼り付け。済巻、垂下文様が描く。地文はE1調文。複縫調文。E1よりも隆縫がやや細くなる。	○▲○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E			
15	SK01 一括	調文 土器	口縁 突起 部	-	-	69.5	平縫気味な口縁。	大二重調文が頭部より斜めに舟形の区画へと連続する。右辺には同式調文による曲巻調文が描かれる。区画内。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E				
16	SK01 拂土	調文 土器	深 鉢	直 突起 部	-	-	33.3	円柱状で、下端は盲孔が開いた形。	頭部より左～右縫合部が「匸」字の字面に下り、縫合部に連続する。盲孔部分は僅量となり上部にはE1調文が描かれてある。	○▲○○○	浅い褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E			
17	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	脚 鋸片	-	-	36.9	やや内溝する。	頭部によろしく済巻文を描く。胴部に擦り消し手法で縫合部にも頭部が残る。	○▲○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
18	SK01 No.17-2 一括	調文 土器	深 鉢	脚 鋸片	-	-	260.6	大きく外反する斜板部分。	口辺は大きく無文部が広がり、胴部と底部より縫合部が「匸」字の字面に下り、縫合部に擦り消し手法で縫合部が残る。地文はE1調文。	○○○○○	浅い褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
19	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	脚 鋸片	-	-	76.5	やや外反する。	底縫合部に擦り消し手法で縫合部が残る。地文はE1調文。	○○○○▲	褐色	良好	加賀利E.3 古～中				
20	SK01 No.10	調文 土器	太 鉢	把手 部	-	-	146.1	腹側に貼り付けられる桶伏底縫合部より縫合部で立てる。	底縫合部に擦り消し手法で縫合部が残る。地文は無文部。	○○○○○	浅い褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E			
21	SK01 No.17-01	調文 土器	深 鉢	脚 鋸片	-	8.7	27.5	1033.9	底縫合部より縫合部で立てる。上半でやや外反する。	底縫合部の頭部に擦り消し手法で縫合部が残る。地文はE1調文。	○○○○▲	浅い褐色	良好	加賀利E.3 古～中	信州系E		
22	SK01 No.18	調文 土器	太 鉢	底 部	-	9.0	7.8	645.6	底縫合部より縫合部は大きく開く。	底縫合部より縫合部で立てる。頭部に擦り消し手法で縫合部が残る。地文は無文部。	○○○○○	にぶい 褐色	良好	加賀利E.3 古～中			
23	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	29.5	8.5	25.3	121.8	内溝する口縁でやや状況。	口辺は無文部。以下にE1調文1/4による「匸」字の字面が描かれる。頭部に平行する底縫合部が描かれる。地文は縫合部の条痕。	○○○○○	暗褐色	良好	透底土器 3			
24	SK01 一括	調文 土器	深 鉢	口縁 鋸片	-	-	60.0	内溝する口縁でやや状況。	口辺は無文部。以下に交互E1調文が配される。地紋はE1調文を繰り返す。	○▲○○○	暗褐色	良好	透底土器 3				



第 20 図 第 1 号土坑出土遺物 (3)

0 (1/3) 10cm

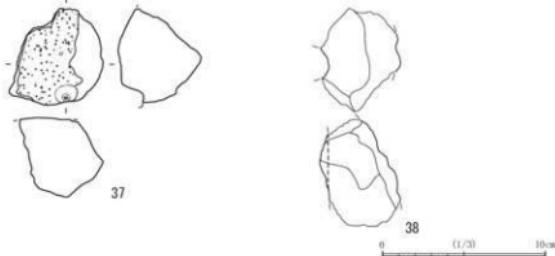
第13表 第1号土坑出土土器観察表(2)

遺物番号	注記番号	種類	器種	計測値			器形の特徴	胎土	胎色	焼成	型式	(cm・g)	
				残存	口径(㎜)	底径(㎜)							
25	SK01-1	圓文 土器	深鉢	白練 盤片	-	-	42.1	内溝する口縁でやや波状。	口辺は無文帯。以下に交瓦網彫文が配される。地紋は斜方方向のLの地紋。	○ ○ ▲ ○	暗褐色	良好	唐振文土器 部3
26	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	46.2	内溝する口縁。	口辺には沈縁を有し、三円形網彫文が並ぶ。以下に一本の沈縁による地紋と斜方方向のLの地紋。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	唐振文土器 部3
27	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	25.8	内溝する口縁。	口辺は沈縁の無文帯。以下に太い沈縁が一条ある。地紋は斜方方向のLの地紋。	○ ○ ▲ ○	渋い褐色	良好	唐振文土器 部3
28	SK01-1	圓文 土器	深鉢	脚部 盤片	-	-	29.1	やや外反する。	器面に二段の弧線が描かれる。地紋は斜方方向のLの地紋。	○ ▲ ○ ○	暗褐色	良好	唐振文土器 部3
29	SK01-1	圓文 土器	深鉢	脚部 盤片	-	-	25.7	やや外反する。	筋目調による無文帯が沿う。地紋は斜方方向のLの地紋。	○ ▲ ○ ○	にぶい褐色	良好	唐振文土器 部3
30	SK01-1	圓文 土器	深鉢	脚部 盤片	-	-	32.9	内溝する。脚部 半盤片	窓状方向に取り付けし斜彫文が並下る。地紋はLの地紋を複数有する。	○ ○ ○ ○	にぶい褐色	良好	唐振文土器 部3
31	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	48.2	内溝する。	口辺部にやや沈縁と細い沈縁による組み合わせで支脚が描かれる。	○ ○ ○ ○	にぶい褐色	質不明	
32	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	25.1	直縁のに立つ。	口辺に沈縁による圓形区画。地紋は斜方方向のLの地紋。	○ ○ ○ ○	暗褐色	良好	加賀利正 3古～中 ニチュアル
33	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	21.9	内溝し肥厚する。	口端部直下に太い沈縁による斜方向の窓状地紋を描く。	○ ▲ ○ ○	暗灰褐色	良好	曾利3時
34	SK01-1	圓文 土器 No.16・13	深鉢	1/3	33.3	7.6	18.9	底盤下端より大きく開き、上方でやや内溝して口縁に至る。	口辺部は無文帯が広がる。太い沈縁が一巻添り、以下はLの地紋が斜方方向に回転施加される。脚下端はケズリ形態。	○ ○ ○ ○	にぶい褐色	良好	加賀利正 3古～中 セイタ
35	SK01-1	圓文 土器 No.4	深鉢	口縁 盤片	-	-	995.8	底盤下端より大きく開き、上方でやや内溝して口縁に至る。	底盤下端より大きめに開き、Lの地紋が斜方方向の条縞が口縁から脚下端まで描かれる。	○ ○ ○ ○	にぶい褐色	良好	加賀利正 3古～中 セイタ
36	SK01-1	圓文 土器	深鉢	口縁 盤片	-	-	75.1	内溝した後、相く立つ。	口辺は平底。口辺直下に斜縫を有する。地紋が柱状状に張飾され突出部に玉文三文が配される。	○ ○ ○ ○	褐色	良好	井戸尾2

石器

37は磨石の破片である。一部を残し破損するもので、被熱による破損の可能性がある。旧形状は不明。材質は多孔質安山岩。

38は赤色顔料の塊である。自然礫と想定されるが、一部に円形の孔状の部分が確認される。石英などの鉱物を多く含み砂岩質である。表面は被熱による赤色化が進んでいるものと判断される。

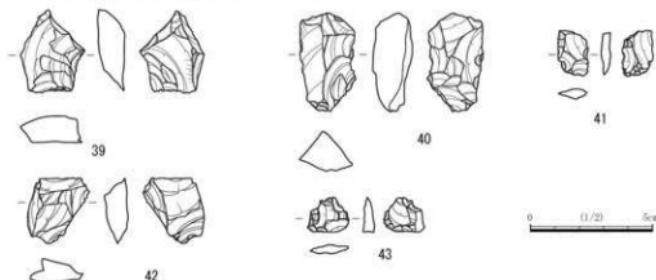


第21図 第1号土坑出土遺物(4)

第14表 第1号土坑出土石器観察表(1)

測定番号	注記番号	種類	器種	計測値			器形の特徴	材質	備考	(cm・g)	
				残存	幅(㎜)	幅(㎜)					
27	SK01-1	石器	磨石	大きめ 盤片	5.7	5.9	5.1	82.5	圓形地縫を残す。人為的な打ち欠きが不明。	多孔質安山岩	
28	SK01-1	石器	磨石	ベンガラ	6.3	4.8	4.8	105.0	浅く削成されたものの、輪化第二段で石英等の結晶鉱物が確認できる。ベンガラ	赤色顔料	

39～43はSI02出土チャートと類似する。同様に渡良瀬川流域のチャートと判断される。剥片の大きさ、さらに43の資料から石器製作のために持ち込まれた剥片と判断した。本遺跡検出のチャートについては第3章まとめで述べたい。



第22図 第1号土坑出土遺物(5)

第15表 第1号土坑出土石器観察表(2)

測定番号	注記番号	種類	形態	残存	計測値	計測の形態	計測の形態	材質	備考
39	SK01-15	石器	次加工	完形	3.2 2.6 1.1 10.1	剥がされた剥片の側面から打痕を加えている。左側面に刃部作出か。		チャート	
40	SK01-15	G22	残片	完形	4.0 2.3 1.5 13.1	剥片を削り出した面が多方面に残る。		チャート	
41	SK01-15	G23	縦縫剥片	完形	1.8 1.2 0.4 1.2	剥片のやや小さな側片。打撃によるもので、大型石器の作成時に剥がされたものか。		チャート	
42	SK01-15	G25	次加工	完形	2.6 2.3 1.0 6.7	剥片の両端から二次的剥離。		チャート	
43	SK01-15	石器	方形剥片	完形	1.4 1.6 0.5 1.3	方形のやや小さな側片。打撃によるもので、大型石器の作成時に剥がされたものか。		チャート	

第3節 ピット(P)

・P01

検出位置：1区南西部。規模：84.2×75.1×13.8 cm。形状：平面形は不整円形。断面は浅い皿字状。覆土：自然堆積の2層。遺物：遺物は出土していない。
1層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量、黒色土混じり しまり粘性ややあり
2層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック中量、しまり粘性ややあり

・P02

検出位置：1区南西端部。規模：59.6×47.6×33.3 cm。形状：梢円形。断面は「U」字状。覆土：3層に分層され、自然堆積を示す。

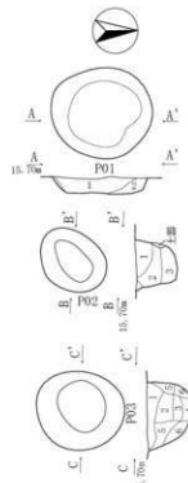
遺物：105.2g。2個体の加曾利E3式土器深鉢口縁が出土している。

掲載はない。
1層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 しまり粘性ややあり
2層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 暗褐色ブロック混じり しまり粘性ややあり
3層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック中量 しまり粘性ややあり

・P03

検出位置：1区南西端部。規模：47.3×47.6×33.3 cm。形状：梢円形。断面は「U」字状。覆土：6層に分層され、柱痕が中央部分に円筒状に残る。遺物：165.9gの縄文土器が出土している。時期はいずれも加曾利E3式古～中段階で3個体以上ある。掲載遺物はない。

1層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 しまり粘性ややあり
2層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 暗褐色ブロック混じり しまり粘性ややあり
3層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック中量 しまり粘性ややあり
4層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 暗褐色ブロック混じり しまり粘性ややあり
5層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック中量 しまり粘性ややあり
6層 7.SYK3/4暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 黒色土ブロック混じり しまり粘性ややあり



第23図 ピット

第3章　まとめ

第1節　遺構について

検出された遺構は住居跡2軒・土坑1基・ピット3基であった。遺構間の切り合い関係もなく、また、出土した遺物からいざれも加曾利E3式古～中段階の範疇に含まれるもので、一部新段階や加曾利E4式と思われる資料もあるが、微量で各遺構の時間差は明確にはできなかった。

当初、周辺住民の方から、本地域畠地の耕作時に袋状の土坑から完形土器がかなり発見されると聞かされていたため、阿玉台式後半から加曾利E式前半段階の存在を予想していたが、想定を覆す結果となった。遺構全景写真を撮影した結果、同地点の周辺には複数の黒色を呈するソイルマークが点在しており、細かな型式差は不明であるが、中期を中心とする遺跡が展開していることが想定される。

検出された住居跡は2軒のみで集落群は検出されていない。さらに2軒の住居の柱穴の配置についても特徴だった共通性は認められない。

土坑は浅い皿状のテラス中央に、同心円状に円形のやや中段が膨らむ緩やかな袋状の土坑を有するものであった。この形状は阿玉台式から中期中葉に見られる所謂プラスコ土坑とは異なる。加曾利E3式頃に見られる小堅穴状の形状を呈する。住居とは異なり炉、柱穴ともに持たない。同様の土坑については中央部に柱穴を有するものも知られる。

加曾利E式後半の集落は、台地中央の空白域を埋むように存在し土坑群もほぼ同様の分布状況で環状の分布を示す傾向がある。本遺跡のような広大な平坦な台地上にどのように遺構が展開していたのか興味深い。今後の成果に期待したい。

第2節　本遺跡出土土器資料の種類とその組成について

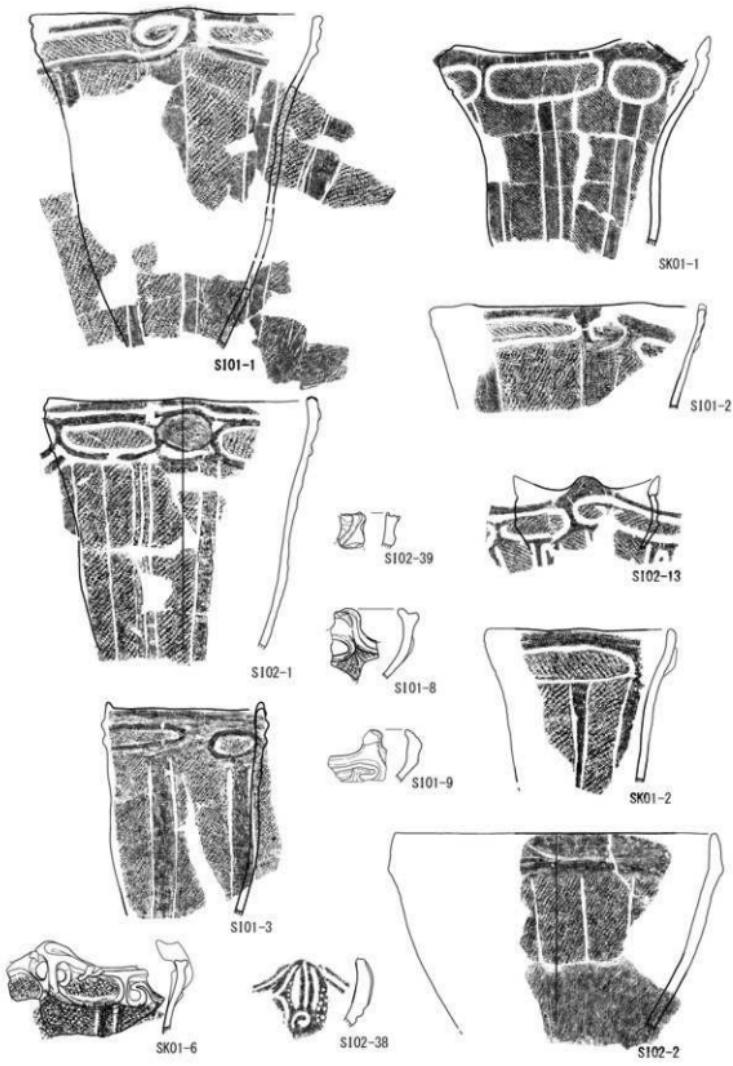
i 深鉢（第24図）

① キャリバー型の深鉢は徐々に頭部括れの退化が進み、屈曲が弱く緩やかな外反器形から直線的に広がるもの等に加え、底部から円筒状に立ち上がるるものも出現する。

② 口縁直下の渦巻文が崩れ形骸化する。さらに文様は独立した梢円区画へと省略化される。また、これらの文様を構成する区画帯には、断面が低い蒲鉾状の隆線、凸帶状に高くなるものと、太い沈線のみによるものに分けられる。凸帶状に高い隆線の貼り付けによる区画文様は近隣の遺跡でも類例がなく、その系譜については東北地方大木式の影響が想定できる。4単位波状口縁の波頂部に「の」の字の沈線が付随するものも一定量の存在が確認できる。

③ 口縁部文様帯の直下では、磨消懸垂文が垂下する。懸垂文の幅を広く取り、中央部分の縄文帯が狭くなるものの他に、縄文帯を幅広に取り、中央部分に蛇行沈線を垂下させる古い段階の資料もある。

④ 地文は縦方向に回転施文される磨消し縄文の手法を探るものが主体であるが、沈線間に充填するように丁寧な施文を行なった後に再度沈線及び磨消帯を撫で直し、無文部にはみ出した縄文を磨り消しているものが見られる。当初より全面に地文を施文するものではなく、縄文施文想定部分に縄文を施文後、枠外にはみだした部分を再び磨り消すものの存在を再認識した。（仮称



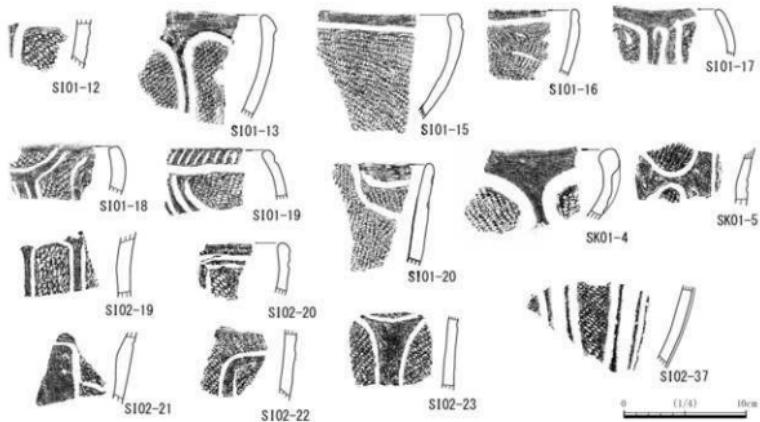
第24図 加曾利E 3式深鉢

充填磨消繩文) 今後、地文、磨消繩文、充填繩文の用語の使用法には若干の検討が必要と考える。

加曾利E式の伝統的な口縁部に横回転の充填手法の繩文を施し、胴部に縦回転の繩文を整然と施す深鉢と、区画内まで同一の繩文が縦回転施文するもの双方が見られる。一方で加曾利E3式新段階とした土器にも区画帯がないにもかかわらず、口唇部のみに横回転の繩文を施し、胴部は縦回転の加曾利E式の伝統的施文方法を探る一群が確認されている。

⑤ 繩には、単節 RL・LR のものが主体で、無節及び複節のものも少量含まれる。特に前項のとおり繩文を縦方向に整然と施文させる技法は、南関東地方将監山遺跡や、古井戸遺跡同様にその傾向が強く見られる。一方で、区画内の地文に沈線を充填させる信州系の郷土式の土器は出土していない。SK01-31は満巻文が崩れ、放射状の沈線に弱い沈線を組み込むものに類似するが沈線は細く弱々しい。信州系とするにはやや様相が異なるものと判断している。なお、富岡市内で同様の資料が出土していることを、角田真也氏に教授を受けた。

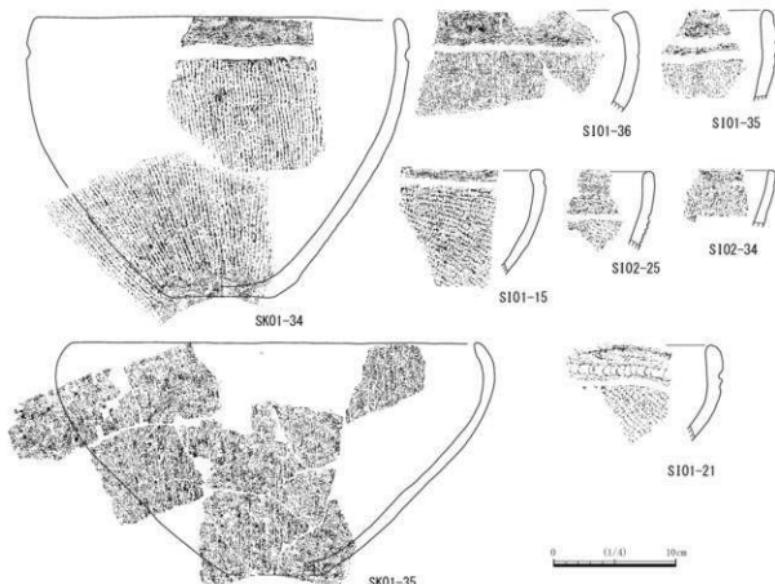
⑥ わずかな量であるが、口縁部直下に逆「U」字状の文様区画を有する土器が出土している。SI01-12～20、SI02-18～24等は加曾利E3式新段階に含まれるもので新しい要素を有する。また、SI02-37は微隆線が用いられるもので、加曾利E4式に含まれる。



第25図 加曾利E3～E4式

ii 鉢(第26図)

- ① 口縁部が強く内湾して、胴部に括れを有さず、直線的に底部に至る器形が主体となる。
- ② 文様構成は口縁部直下に無文帶を有し、以下にやや太い沈線が1・2条巡る。多くの場合地文は条線によるものが多く、SI01-35・36、SK01-35では縦方向の櫛歯状工具による条線が整然と描かれる。一方、SK01-34ではLの捺糸文が縦方向に密に施文される。
- ③ 基本的に連弧文系の土器に鉢形の土器は存在しないと筆者は考えている。SI01-21・22では地文がいざれも櫛歯状の工具によって波状に描かれる。22では口縁部に無文帶がない。



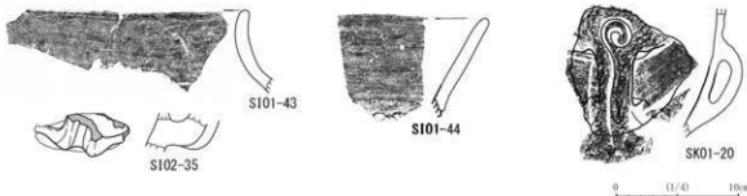
第26図 鉢

III 壺・双耳壺(第27図)

① 双耳壺としたものはSI01-43・44、SI02-35・SK01-20の4点である。SI01-42・43では厚手の大形土器で明瞭に器形が判断できる資料とは言えないが、太鼓状を呈する器形と想定される。把手部分が欠けるが、概ね幅広の無文口縁が外反もしくは屈曲して開き、胴部には渦巻文様が主体に描かれるものであろう。

② 把手部分は胴屈曲部直下に橋状に貼り付けられ、SI02-35では背割りの沈線が、SK01-20では縄文地に渦巻文が描かれる。

③ 地文が観察できるSK01-20のみがRL縄文で、その他は磨かれ無文である。



第27図 壺・双耳壺

iv 有孔鍔付土器 (第28図)

① 器厚が極めて薄く、口唇部は屈曲して短く立つ。胴部上半で強く内湾し口唇部と鍔部分に貫通孔、もしくは橋状の把手を有する。口縁部及び胴部は極めて丁寧に磨かれ、複数の遺物に赤彩が施される。

② 本遺跡ではSI01-40・41、SI02-36の3点が出土している。薄く赤彩の塗布を行うなどと特殊な器形として通常の食膳具とは異なる土器であろう。甘樂川・碓氷川水系では下鎌田遺跡(大賀1997)、信州では更埴市屋代遺跡群(木沢2000)、北東関東地域では常陸太田市の滝ノ上遺跡I(後間2014)にも出土例がある。いずれも加曾利E3式古～中でも大木9a～b式に平行する段階とされている。

③ 図として掲載に至らなかったが返還準備作業中に、小形の有孔鍔付土器のミニチュア土器が出土している。全体で2cm程度の球形で、1/3程度の資料である。器面にわずかながら貼り付けによる文様が描かれる。 第28図 有孔鍔付土器

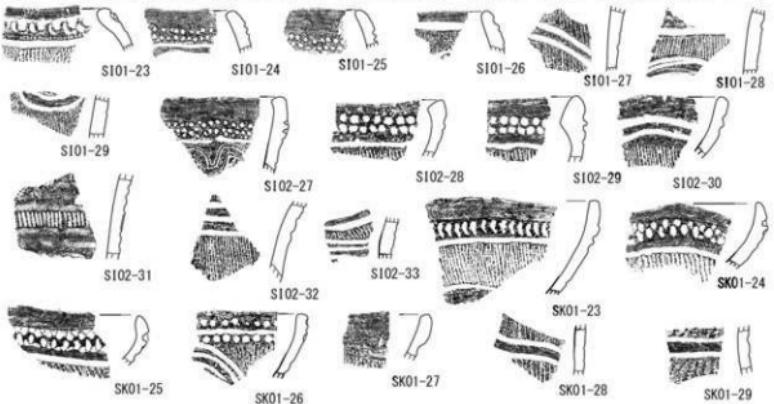
v 連弧文土器 (第29図)

① いずれの遺構からも一定量の出土が見られるが、資料的には細片が多く主体を成す土器ではない。口縁は平縁または波状を呈するもの双方が見られる。

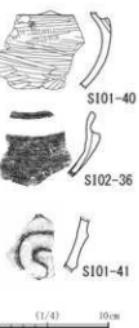
② 口辺に無文帯、境に沈線が1・2条巡り、この口辺沈線直上に刺突列を有するもの多く、「C」字状(押し引き文)や半截竹箇を両端から削り落とした二股の工具による刺突列(円形刺突文)、交互刺突文等多彩である。このような刺突文を施す連弧文系土器は加曾利E3式古～中段階まで継続し、最終段階連弧文式3段階に比定されている。

③ 地文は撫糸文と条線の双方が見られる。SI01-22で単節の縄文LR、SI01-23で撫糸文L、その他は条線であるが、並行沈線と櫛齒状工具の双方が見られる。

④ 所謂連弧文土器の盛衰を考えるならば、本遺跡検出遺構は加曾利E3式古～中段階と想定され、該期は連弧文土器の衰退期直前で、連弧文が横帶の波状文に変化する段階は存在しない。



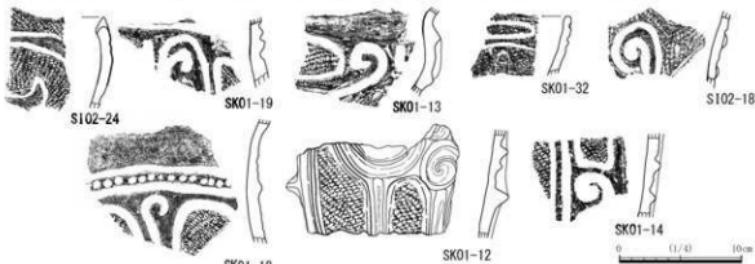
第28図 有孔鍔付土器



vi 大木系土器（第30図）

① 検出された大木系9b式土器は、逆「U」字の区画帯の頂部が平坦化することや、渦巻状曲線が2重隆線によって描かれるものの出現などが特徴である。また、口縁直下の無文帶部分に縦方向の蕨状の文様の施文が行われる。

② 大木9b式期に資料の増加傾向が見られる。これは連弧文系土器の衰退に呼応するかのようであり、加曾利E3式古～中段階の横帯の渦巻文が崩れていく時期にも一致する。



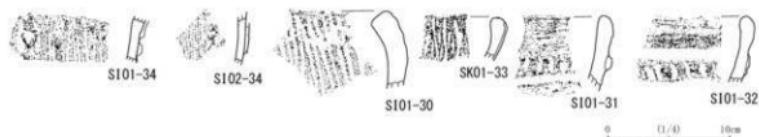
第30図 大木系土器

vii 信州系土器（第31図）

① わずかではあるが出土する。曾利3式に平行する。

② 太い並行条線が口縁に対し斜方向に施文されるもので、連弧文土器の縦方向とは異なっている。また、地文条線に横方向や縦に垂下する隆線が貼り付けられ、刻みが施される。

③ 資料的には極めて少なく、郷土式土器などに見られる、区画内に太い沈線の充填は見られない。



第31図 信州系土器

第3節 検出されたチャート製有茎石鏃

① 整理作業段階で、チャート製の石器剥片の存在が気になっていたが、SI01で5点、SI02では8点、SK01で出土遺物の5点、合計18点が出土している。この内石鏃完品を除く16点の総重量は143.8g。1点当たりの平均では9g弱になる。剥片の多くの面に節理面を残すチャートで、原産地の素材は板状の層を成すものと想定された。しかも、節理が多く多方面に疎密節理が観察される。関東山地南麓や渡良瀬川流域において縄文時代中期後半以降にチャートを素材とする石器の数が増加する傾向は知られている。厳密な産地同定には放散虫化石の分析が必要となるが、本遺跡の立地から同一の原産地が想定できる。

② SI02出土の49はチャートの有茎石鏃である。共伴したチャート剥片SI02-50～56はいず

れも4cm四方程度の方形に近い剥片ばかりで、板状石核から剥がされ二次加工が見られない。これらは石器製作の素材として持ち込まれたものと想定される。同様にSI01・SK01でもチャート製品が出土している。詳細はチャート石器組成表に纏めた。

第16表 出土チャート組成表

遺物番号	注記	種類	材質	形狀の特徴	(cm・g)			
					幅	横	厚	重量
SK01-29	SK01-1 残	二次加工剥片	チャート	剥がされた剥片の側面から打撃を加えている。左側面に刃部作出か。	3.2	2.6	1.1	10.1
SK01-40	SK01-1 残	残核	チャート	剥片を剥いた面が多方面に残る。	4.0	2.3	1.5	13.1
SK01-41	SK01-1 残	剥片	チャート	縦長のやや小さな剥片。打撃によるもので、大型石器の作成時に剥がされたものか。	1.8	1.2	0.4	1.2
SK01-42	SK01-1 残	二次加工剥片	チャート	剥片の側面から二次的剥離。	2.6	2.3	1.0	6.7
SK01-43	SK01-1 残	剥片	チャート	左側のやや小さな剥片。打撃によるもので、大型石器の作成時に剥がされたものか。	1.4	1.6	0.5	1.3
S102-49	S102-Na.19	石核	チャート	有舌、底部折損。	(2.5)	(1.6)	0.6	1.8
S102-50	S102-2 IK-1 残	櫛	チャート	ビエヌ・エスキヨウ石器未完成。	3.1	2.7	1.2	9.1
S102-51	S102-2 IK-1 残	残核	チャート	剥片を剥いた痕跡多数。	4.2	3.3	1.4	18.3
S102-52	S102-2 IK-1 残	剥片	チャート	方型。	2.8	3.2	1.3	12.7
S102-53	S102-1 IK-1 残	剥片	チャート	方型。	3.7	4.0	1.4	17.7
S102-54	S102-2 IK-1 残	剥片	チャート	縦長。	3.3	2.6	1.8	8.9
S102-55	S102-4 IK-1 残	剥片	チャート	縦長。	3.7	2.4	0.9	8.6
S102-56	S102-1 IK-1 残	剥片	チャート	縦長。	3.8	3.0	1.1	8.9
54	S101-Na.1	石核	チャート	ハート型。	4.4	3.8	1.4	9.9
米南畿	S101-Na.01	残核	チャート	—	—	—	—	14.2
米南畿	S101-Na.27	石器未完成	チャート	—	—	—	—	3.3

第4節 本遺構出土加曾利E 3式土器の編年位置づけ

本遺跡から検出された土器は加曾利E 3式古～中段階にほぼ集約される。同大木分類では第9期b式段階に相当し、北関東では荒砥前原41号住居（藤巻1985）、埼玉県では宿東A区48号住居跡段階（中平1995）に類似もしくはこれらよりもやや新しい段階と考えられる。器種では深鉢形・鉢形・壺形（双耳壺）・有孔跨付土器等が確認されている。同じ器形でも文様の構成や手法の違いから複数の分類が可能である。特に深鉢の口縁部形態では、渦巻状の横帯区画が崩れ、やがて梢円形の区画帯へと変化する状況、さらに文様構成が隆線から凸線または太い沈線による区画構成への変化も確認できた。

石器から見ても同様にチャート製の石器工房並びに有茎鐵の存在は、桧の木遺跡（中村2006）と一致しており、中期末葉の石器の特徴と言える。芹沢清八は渡良瀬川下流域の栃木県茂木町内遺跡出土の「桧の木型石器」に注目し、中期末葉の遺物として報告書から抽出している（芹沢2005）。ただし、本遺跡出土SI02-45有茎鐵の形状は、大工原分類の後期後葉から晩期にかかる「暗通型類似形態の中形・小形の形状」には類似するが、舌部が短く平基三角形鐵の基部にわざかに脣状の突起を有する「桧の木原型」とは形態的に異なる。本遺跡も渡良瀬川下流域に位置するもので、チャート製石器の形状に差異が認められるものの、共伴土器型式については一致する。

舌状石器の形状の差異については今後の研究に期待したい。なお、本遺跡周辺における旧石器時代関連の遺跡については管見に触れるものはなかった。

長丁遺跡は前述のとおり、渡良瀬遊水地に近く利根川・鬼怒川・小貝川が合流する常総台地の北西端部に位置し、大宮台地・北総台地との交差点でもある。古来より文化の交流点に位置していたのであろう。今回は偶然の調査区設定であったものの、住跡2軒と土坑1基が検出され、いずれも加曾利E 3式古～中段階の範疇に収まる遺構の細かな分析・検討を試みることができた。

共伴する信州系土器・連弧文系土器・大木9a式等との関係から見ても、出土遺物は加曾利E3式の古～中段階から新段階にあって、加曾利E4式土器の芽生える直前段階の好資料と言える。

最後に、加曾利E式の編年については『総覧 縄文土器』小林達雄編『総覧 縄文土器』編集委員会2008年を基本とし、『中期後半の再検討』第16回 縄文セミナー2003、千葉大学柳澤清一・加曾利E3～4式分類2006を踏まえて分類した。

編集終了直前に弊社取締役が1986年に調査を行った千葉県八千代市真木野向山遺跡の存在を知った。本遺跡の直後段階の好資料と判断されたので、ここに付記しておく。同遺跡は凡そ20年経た平成19年に市教育委員会により報告書として刊行されたものである。

この資料が早く世に出ていれば現在の加曾利E3～4式研究により早い見解が示された可能性があったと思われる。
(橋邊)

参考引用文献

- 1926 東木龍七「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線」『地理学評論』vol.2 №7/8 26日本地理学会・2014 荒木 稔「縄文海道タライマックス潮の海潮の分布」『花見川流域を歩く』より
- 1973 谷井 雄『坂東山遺跡』埼玉県教育委員会
- 1975 羽鳥謙三「関東ローム層と関東平野」『URAN KUBOTA』№11/12-特集：第四紀 - ブクボタ
- 1978 藤本誠城『那珂川下流域の石器時代研究 I』
- 1980 菊池隆男『古東京鶴』『URAN KUBOTA』№18/16-特集：関東堆積盆地 ブクボタ
- 1982 長命 豊他『猿島郡』『茨城県の地名』日本歴史地名大系 第8巻 岡平凡社
- 1982 山田義高他『扇山跡』東京医科大学
- 1984 西村正衛『石器時代における利根川下流域の研究・貝塚を中心として』早稲田大学出版部
- 1985 藤澤幸男『荒砥前原遺跡』群馬県埋蔵文化財事業団
- 1986 石津和則『符籜縄文時代』財团法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 1989 宮井栄一『古井戸遺跡』財团法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 1993 国本健一他『谷二・二反田・下向山』財团法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 1995 中平 黑『宿東遺跡 7次調査』日高市教育委員会
- 1996『南蛇井増光寺IV』群馬県埋蔵文化財事業団
- 1996 砚野治司『櫛木山遺跡 第二次調査』北本市教育委員会
- 1997 大木神一郎『南蛇井増光寺V』群馬県埋蔵文化財事業団
- 1997 金子直行『戸崎前遺跡』財团法人埼玉県埋蔵文化財事業団
- 1997 大賀 健『下緑田遺跡』下仁田町遺跡調査会・山武考古学研究所
- 1997 中村信博『古宿遺跡』『茂木町史』資料編Ⅰ 原始古代・中世とも木町町史編さん委員会
- 2000 水木教子他『上信越道現文24・更埴市内その3-更埴条理遺跡・墨代遺跡群他-縄文時代編-』長野県埋蔵文化財センター
- 2002 中沢 悟『波志江中野面』群馬県埋蔵文化財事業団
- 2003 縄文セミナーの会『中期後半の再検討』第16回 縄文セミナー
・間根慎二「群馬県における加曾利E式（E3式縄文）の地域相」
・細田 勝「南関東加曾利E式について」
・鶴田弘実「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」
- 2005『石器石材類』一在地系石材としてのチャート-手稿集 篠懸野岩宿文化資料館 岩宿フォーラム実行委員会
・西井幸雄「大宮台地におけるチャートの利用状況」
・芹澤清八「柄木県内のチャート製石器について」
- 2006 中村信博『信の木遺跡調査報告書！』茂木町教育委員会
- 2006 中村信博『信の木遺跡調査報告書II』茂木町教育委員会
- 2006 柳澤清一『縄文時代中・後期の編年学研究：列島における小綱別彌岡網の構造をめざして』千葉大学考古学研究叢書3
- 2008 小林達雄編『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
・水瀬史人『連弧文系土器』
- 2008 大賀 健『真木野向山遺跡』理藏文化財発掘報告書-宗教法入 一進寺 八千代市遺跡調査会 1986年調査
- 2009 大賀 健『赤弥宗遺跡（東地区）』県営畑地帶合整備事業（扱い手支援型）理藏文化財調査報告書 土浦市教育委員会 有限会社 勾玉工房 Mogi
- 2010 大賀 健『赤弥宗遺跡（中央地区）』県営畑地帶合整備事業（扱い手支援型）理藏文化財調査報告書 土浦市教育委員会 有限会社 勾

- 玉工房 Mogi
- 2011 大賀 健『赤堀堂遺跡（西地区）』県営畠地帯総合整備事業（担い手支援型）埋蔵文化財調査報告書 土浦市教育委員会 有限会社 勾玉工房 Mogi
- 2012 小林和彦『宮内遺跡・国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書-』茨城県教育財團文化財調査報告第369集（公財）茨城県教育財團
- 2013 佐藤一也他『然山西遺跡・一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書-』茨城県教育財團文化財調査報告第379集（公財）茨城県教育財團
- 2013 碓引英樹『駒寄岳遺跡・主要地方道結城坂東線バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書-』茨城県教育財團文化財調査報告第372集（公財）茨城県教育財團
- 2013 長山明弘『加曾利E3式土器の「組列」編年と動物形象突起の変遷 一土器論を基礎とした先史文化の研究に向けてー』千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 2014 逢間 陽・高橋清文ほか『龍ノ上遺跡1』一畠地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査3－常陸大宮市教育委員会・毛野考古学研究所
- 2015 山野井 優『日本の土・地質学が明かす黒土と縄文文化-』筑地書館
- 2017 研究代表 大工原豊『石鏡を中心とする押正剥離系石器群の石材別編年の整備』整備研究（C）（25370894）
・井澤清八「桧の木型石鏡の提唱について」